

非貧困県での中国農村留守児童に関する研究 ： 精神的影響に着目して

満, 伶 / MAN, Ling

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

78

(発行年 / Year)

2017-03-24

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2017-03-24

(学位名 / Degree Name)

修士(国際文化)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

修士論文

指導教授 松本 悟 教授

論文題名

非貧困県での中国農村留守児童に関する研究
——精神的影響に着目して——

国際文化研究科

国際文化専攻修士課程

氏名 満侖

要旨

非貧困県での中国農村留守児童に関する研究

——精神的影響に着目して——

指導教授 松本 悟

国際文化研究科 国際文化専攻 修士課程

満 伶

本研究では中国の留守児童が抱える問題について、先行研究ではあまり触れられていない非貧困地域の状況を調査することを通して、貧困の程度と関係なく生じている留守児童に共通した問題を特定した上で、それが留守児童に及ぼす影響を明らかにする。

急速な経済発展の中で大きな問題となっている留守児童とは、親の片方もしくは両方が農村から都市に一時的に移り住み、戸籍の所在地の農村に残され、親と一緒に暮らせない18歳未満の未成年者である（中華婦女連合会 2008）。1970年代末の改革開放政策の導入をきっかけに、都市の経済が発展し、それに付随して農村の過剰な労働者が都市に流入した結果、農村に残される子どもが多くなった。2000年に約2443万人だった農村留守児童は2010年には6100万を超えている。

新聞などマスメディアは、自殺や不慮の事故（交通事故、火事）、性的暴力の被害など留守児童をめぐる問題を頻繁に報道し、先行研究では留守児童数の変化とその背景や留守児童を取り巻く社会問題をさかんに取り上げている。具体的には学校や家庭に係る問題、性的暴力の被害と不慮の事故、犯罪の加害者になる問題、それに留守児童の心に及ぼす影響である。しかし、報道も先行研究も貧困発生率の高い地域に焦点をあてる傾向にあった。そこで、本研究ではまず、人数的には多数を占めると考えられる貧困地域以外の留守児童の実情を調査することで、経済状況と関係なく生じている留守児童共通の問題を特定した。

調査地は湖南省澧県澧澗村である。その理由は、知り合いの紹介で行った現地での予備調査の結果、家庭の収入やインフラ環境からみても村の経済状況が貧困地域にあたらないことを確認したからである。

調査の結果、先行研究で指摘された問題が当てはまらないものと当てはまるものは以下の通りだった。

当てはまらない点としては、まず学校においては設備が整っており、1日3度栄養バランスの取れた食事が提供されていた。また、学校と後見人が問題に対応できる連絡体制を持ち、つながりの強さがうかがえた。家庭についても後見人は留守児童の健康面を気遣い、学業面で心配事があれば送迎時に教員と話し合うなど子どもの健康や学業に関心を持っていた。性的暴力や不慮の事故については、県政府、学校、家庭の3者が協力して子どもの安全を守ろうと様々な取り組みを行っており、深刻な被害は確認されなかった。犯罪については、後見人による厳しいしつけや成績／態度の悪い児童への学校側のきめ細かな指導、さらに郷や鎮のようにパチンコなどの遊戯施設がなく娯楽のため窃盗を犯す可能性がないという点から留守児童が犯罪を起こす傾向はみられなかった。

一方、先行研究の指摘が当てはまったのは、後見人の学力不足や農作業の忙しさから子どもの勉強の面倒を見られないことや、親に会えないつらさや後見人の理解が得られていないと感じることによる心の悩みである。

前者の問題は、3度の食事の提供によって子どもが学校にいる時間を増やし、その合間に教員が補習するという解決策が講じられていた。しかし後者の精神的な問題は、教員や親、後見人が問題として認識すらしておらず、心の悩みは大人になってからも影響を及ぼす可能性がある。そこで、農村の貧困状況と関わりなく生じている問題として留守児童の精神的苦痛を更に研究し、成人後に至るまでの影響を明らかにした。調査対象は、同じ湖南省澧県澧澗村出身で、留守児童数が増加した時期に留守児童を経験した20代後半の8人である。半構造化インタビューを行った。

調査の結果、3つの影響が確認された。第1に、自分の性格の否定的な側面を留守児童の経験とつなげて考える傾向にあった。第2に、親子のコミュニケーションの不足が進路等に対する自信の喪失や、大人になっても親子で話ができない問題、あるいは親に頼らない独立意識を元留守児童に与えていた。留守児童として心に抱えた悩みが、成人後も親子関係を更に希薄にしている可能性がある。第3に、元留守児童は自分の子どもを留守児童にしたくない、一緒に暮らしたいと考えていた。しかし、一緒に暮らしたい場所は出身地の村ではなく都市だった。

本研究は限られた人数・地域を対象とした質的調査であり、調査結果を一般論として捉えることはできない。しかし、マスメディアや先行研究ではほとんど取り上げられない貧困地域以外の、いわば「普通の」留守児童が抱える問題を示した点は意義があったといえる。心の問題はその典型である。一方、農村留守児童が成人後都市で働き、次世代の留守児童を生むことが危惧されるが、調査対象者全員がそれを望まなかったことは明るい展望である。しかし、現状の政策では農村からの出稼ぎ者で都市に定住できるのは高学歴や特定の資格を持つ者に限られているため、留守児童の「再生産」を招く恐れはある。今後は、非貧困地域や精神的な苦痛に着目した留守児童の更なる研究、さらに次世代の留守児童発生を防ぐために親子と一緒に暮らせる政策の改革が必要である。

目次

第1章 中国農村留守児童問題の深刻さ	1
1.1 農村留守児童とは.....	1
1.2 問題意識.....	2
1.3 研究目的.....	4
1.4 研究方法と問い.....	6
1.5 論文の構成.....	7
第2章 農村留守児童を取り巻く状況	8
2.1 農村留守児童の発生と増加.....	8
2.2 留守児童に影響を与える後見人.....	12
2.3 農村の学校特有の問題.....	14
2.4 留守児童を取り巻く危険.....	17
2.5 留守児童が加害者となる犯罪.....	18
2.6 親の出稼ぎが留守児童の心に与える影響.....	20
2.7 非貧困地域への着目.....	21
第3章 湖南省非貧困県の農村留守児童についての調査	22
3.1 調査地と調査対象について.....	22
3.1.1 湖南省澧県澧澗村.....	22
3.1.2 調査対象と調査方法.....	24
3.1.3 調査対象に関する基礎情報.....	24
3.2 澧澗村でのインタビュー内容の設定.....	27
3.3 澧澗村の留守児童についての調査結果.....	28
3.3.1 三泉小学校における留守児童の就学状況.....	28
3.3.2 後見人との暮らしについて.....	32
3.3.3 未然に防止される被害.....	35
3.3.4 見られない留守児童による犯罪.....	36
3.3.5 貧困地域と変わらぬ心の苦悩.....	37
3.3.6 貧困状況と無関係な心の問題.....	39
第4章 留守児童経験がもたらした精神的な影響	43
4.1 調査対象者の基本的情報.....	43
4.2 元留守児童に対する質問内容の設定.....	47
4.3 留守児童経験の影響.....	47
4.3.1 元留守児童が自覚する性格への影響.....	48
4.3.2 コミュニケーションに関わる影響.....	53
4.3.3 次の世代を留守児童にしない.....	56

4.4 留守経験がもたらした影響.....	59
第5章 非貧困県の農村留守児童をめぐる状況及び研究の意義と限界	61
5.1 非貧困県の農村留守児童をめぐる状況—心に生じた問題を中心として—.....	61
5.2 研究限界と意義	64
参考文献.....	65
質問紙.....	69

第1章 中国農村留守児童問題の深刻さ

1.1 農村留守児童とは

「留守児童」という用語は1994年第45号の『瞭望新聞周刊』¹の記事の中でフリージャーナリストの一張氏が、親の留学や仕事により祖父母に世話される子どもを指すことばとして初めて使用したと言われる（一張1994）。その当時は留守児童に関する研究がほとんど行われていなかったが、2005年頃から、留守児童の生活状況や精神的な問題などについての研究が急激に増え始め（余2013）、新聞やテレビなどのマスメディアでも2004年から留守児童に関する報道が大幅に増加した（刘2015）。

1978年に中国は改革開放政策²を導入することで経済発展を遂げ、同時に都市で労働力の需要が大幅に増えた。それに付随して、農村から大勢の労働者が都市に流入するようになった。一方で、後述するような戸籍制度の問題から、親だけが農村を離れて都市に出稼ぎに行かざるをえなかったため、子どもたちは農村に残されることが多かった。農村から都市に出稼ぎに行く労働者を「農民工」、農村に取り残された子どもを「農村留守児童」と呼ぶ（段・楊・馬2012）。中華全国婦女連合会³が2008年に発行した『全国農村留守児童状況研究報告』（全国農村留守児童状況研究報告）では、農村留守児童を「親の片方や両方が農村から都市に一時的に移り住み、戸籍の所在地の農村に残され、親と一緒に暮らせない18歳未満の未成年者」と定義⁴している（中華全国婦女連合会2008）。本研究ではこの定義を使用する。

『中国2010年第6次人口普查』（中国2010年第6次国勢調査）の推計によると、2010

¹瞭望新聞周刊は中国で発行部数の非常に多い、時事経済と政治の週刊誌である。1984年4月に創刊した。

²鄧小平を中心として実施された経済政策。文化大革命後の経済を立て直すため、経済特別区の設置、人民公社の解体、海外資本の積極的な導入などが行われ、市場経済への移行が推進された。（デジタル大辞泉 <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001022208600> 閲覧日2016年12月18日）

³社会主義国家建設の初期段階において、党の基本路線を貫徹しながら社会主義の物質文明・精神文明を建設するため1949年3月に発足した。広範な女性を団結させ教育する重要な役割を果たしており、その基本的役割は女性の利益を代表し、守り、男女平等を促すなどである。（チャイナネット <http://japanese.china.org.cn/japanese/77788.htm> 閲覧日2016年12月22日）

⁴中国の最高行政機関で内閣に相当する国務院が2016年11月に発表した「国务院关于加强农村留守儿童关爱保护工作的意见」（中国農村留守児童に対する保護対策強化意見書）では農村留守児童の定義が「親の両方が出稼ぎに行っている、あるいは片方が出稼ぎの場合、残された片親が子どもを世話する能力を持っていない、16歳未満の子ども」に変わった。その結果として、農村留守児童の人数は902万人に激減した。しかし、本研究で参照した先行文献は全て、2008年に中華全国婦女連合会が定めた定義のもと農村留守児童の研究を行っている。したがって、本研究ではこの定義を用いる。（国務院ホームページ http://www.gov.cn/xinwen/2016-11/10/content_5130733.htm 筆者訳 閲覧日2016年12月22日）

年時点で、中国の農村留守児童は 6102 万 5500 人に達し、農村児童の 37.7%、全国児童の 21.9%を占めている（中華全国婦女連合会 2013）。かなりな割合に及んでいるといえる。農村留守児童は出稼ぎしている親と留守宅で世話をする人の属性によって次の 4 つに分類されている。第 1 に、親の片方が都市部に出稼ぎに行き、残りの親と農村で一緒に暮らしている留守児童である。一般的に、この留守児童は、父親が出稼ぎに行き、母親と暮らしている子どもの割合が多い。年齢が低く、留守児童 1 人で生活することはできないケースである。第 2 に、親の両方が出稼ぎに行き、祖父母が世話をしている留守児童である。全国農村留守児童の 3 分の 1 近くを占める。第 3 に、親の両方が出稼ぎに行き、親戚や親の友人が世話をしている留守児童である。祖父母と暮らしている留守児童より、かなり数は少ない。第 4 に、親の両方が出稼ぎに行き、1 人あるいは兄弟姉妹で生活する留守児童である。全国農村留守児童の 3.4%なので割合としては低いが、実数としては 205 万人以上いる。子どもたちだけで生活し、保護者からの愛情や世話を一切受けられないことから、後述するような生活上の困難や社会的な問題に遭遇する可能性が他の農村留守児童より高い傾向にある（ibid.）。

1.2 問題意識

農村留守児童数の増加は様々な問題を中国社会に引き起こしている。この問題の深刻さを示すため、日本や中国の報道から、自殺、性暴力、不慮の事故（火事、交通事故など）などについて述べていく。

2015 年 7 月 3 日、朝日新聞は中国貴州省畢節市茨竹村で、親が出稼ぎで家を離れ、子どもだけで暮らしていた留守児童の兄妹 4 人が 6 月初旬、農薬を飲んで自殺したと報道した。事件が発生したのは貴州省の中で特に貧しい農村部であり、村人の半数ほどが出稼ぎで村を離れていた。自殺した子どもたちは 14 歳の長男と 5~10 歳の妹 3 人であり、父親は出稼ぎで家を離れ、母親は 2 年前に家を出ていた。長男は豚の世話などをしながら、幼い妹たちの面倒を見ていた。また、近所の村人や学校の教員によると、家の中はぼろぼろで汚れており、兄妹は事件が起こる直前 1 ヶ月の間学校に行っていなかった（朝日新聞 2015 年 7 月 3 日朝刊 10 面）。

李・陶（2009）は留守児童の自殺に対する意識を調べるため安徽省六安市の中学校 3 校に在学している生徒 852 人にアンケートを行い、調査結果を『14~16 歳留守児童心理状況及び自殺傾向分析』にまとめた。有効回答数 840 のうち、非留守児童は 506 人中 161 人（29.8%）に自殺をしたい気持ちがある一方、留守児童は 334 人中 160 人（47.6%）に及んだ（李・陶 2009）。

では、なぜ自殺をしたい留守児童の割合が高い傾向にあるのか。青少年心理を研究した陳（2015）は留守児童の自殺原因の分析をした結果、以下のように説明している。留守児童は親から受ける愛情が欠如しているため非留守児童よりもその愛情を得たい気持ちが強い。しかし、親が長期間家に帰れず、子どもをあまり気かけられないため、子どもの欲

求は長い間満たされることはない。その結果、子どもの心は不安定になり、孤独感を生み出しやすくなる。また、親の愛情をもらえる子どもと比べると、留守児童は「自分が親に捨てられた」という劣等感を生み出しやすい。陈（2015）は、こうした劣等感や孤独感が留守児童の自殺願望の生まれやすさにつながっていると指摘する。

一方、子どもの面倒を見る人がいなかったり、後見人があまり子どものことを気にかけなかったりするため、子どもたちが大きな怪我を負うケースも少なくない。例えば、2005年11月20日の新華毎日電訊は、広東省の貧困農村地域で、両親が長い期間、深圳に出稼ぎに行ったままの留守児童3姉妹の悲劇を報じた。3人は80歳前後の祖母が面倒をみていたが、わずか7年間に3姉妹が次々と大やけどを負ったという。ろうそくが原因となった火事で長女が両足に障害を、次女は薪で湯を沸かした際の大やけどで手足が奇形になり、三女も熱湯で大やけどを負ったのである（新華毎日電訊2005年11月20日）。

親が子どものそばにおらず、祖父母も高齢のため子どもの世話を十分にできないため、兄姉は自分のことだけでなく弟妹の面倒もみなくてはならない。子どもたちは祖父母の負担を減らそうと、できるだけ自分たちで家事をすることがこうした事故につながっていると考えられる。

また、不慮の事故（火事、交通事故など）について、『全国农村留守儿童状况调查报告——“全国六类重点青少年群体研究”课题成果』（全国農村留守児童状況に関する研究報告——全国6種類の青少年群体研究）によると、2013年から2014年の2年間で、49.2%の留守児童は不慮の事故に遭ったことがある（中国青少年研究中心2014）。留守児童の後見人である祖父母の多くは高齢で、視力、聴力、体力などが衰えるため、留守児童の面倒を十分に見ることができない。また、大部分の後見人は農作業と家事で忙しいため、留守児童の面倒を見る時間もない。そのため留守児童が何か危険に遭っても、後見人は即座に助けられない（张2008）。

農村留守女児が受ける性的暴力の被害については、2015年7月13日付の中国の全国紙新京報⁵が、中国西北部の寧夏自治区のある村の幼稚園で、12人の女児が男性教員から性的暴行を受けたと報じた。12人のうち11人は留守児童であり、年齢は4歳から6歳までである。2014年2月から4月の期間中に、この男性教員は宿題を添削する理由で女児たちを数回にわたって事務室に呼び、猥褻な行為や強姦を行った。男性教員は女児に対して「幼稚園から除籍する」と脅したため、女児は親に事件を隠していた。被害を受けた女児たちは、この1年間、体調不良と不登校が続いていたが、出稼ぎをしている親はずっと気にかけていなかったという（新京報2015年7月13日）。また、留守児童の性的被害を調査した王（2008）は、四川省内の中学校・高校計10校の1400人を無作為抽出し、アンケート調査を行った。1400人のうち、有効回収率は96%、そのうち留守児童は41.6%を占めた。

⁵ 新京報は2003年11月11日に正式に創刊し、光明日報と南方日報が共同で創設した大衆日刊紙である。国家の許可をもらい、広範囲の地域で読まれている。
（新京報ネット <http://i.bjnews.com.cn/gywm.html> 閲覧日2016年12月29日）

調査の結果、約 9%の留守児童は性的被害に遭ったことがあり、これは非留守児童より 2 ポイント高いことがわかった。また、留守児童に対する性犯罪者のうち、見知らぬ人は 23% を占め、非留守児童より 10 ポイント高い。留守児童は親や後見人の保護がなく、家や通学途中 1 人である場合が多く、非留守児童と比べて見知らぬ人からの被害を受けやすいと王（2008）と張・耿（2016）は指摘する。さらに、農村地域は人口が少なく、家と家の距離も遠いため、児童が被害を受けた時に大きな声で助けを求めても他の人に気づかれにくく、このような農村の地理的環境が加害者に犯行をさせやすい（李 2008）。親や後見人とのコミュニケーションが欠如しているため、留守児童が被害を受けても親や後見人がすぐにこの問題に気づかず対策を講じることがないため、一度犯罪を起こした加害者が同じ地域で性的犯罪を繰り返す可能性もある（田 2015）。

1.3 研究目的

前節で日本と中国の新聞報道を中心にみてきたように、農村留守児童問題は過去 20 年間の中国の経済成長のひずみとして深刻な社会問題になっている。一方で、その深刻さを伝える記事が経済的にかなり貧しい家庭やインフラの整っていない貧困地域の事件に偏って書かれているとの印象を持った。貴州省での留守児童の自殺、広東省での相次ぐ不慮の事故や性暴力被害事件は、いずれも経済的に厳しい状況にある村や家庭で起きたものだった。そこで、貧困と農村留守児童の関係を政府の人口統計などから調査したのが表 1 である。この表は、中国の省ごとの農村留守児童数と農村貧困人口を入手可能な最新データをもとに比較したものである。農村留守児童数が多い順に省を並べ、それぞれの省の農村貧困発生率とその高さの順位を記した。

表 1：中国各省の農村留守児童と貧困人口の分布

省名	2010 年中国各省農村留守児童の分布			2014 年中国各省農村貧困人口の分布	
	農村留守児童の規模 (万人)	全国農村留守児童における割合 (%)	順位 (位)	各省における農村貧困発生率 (%)	順位 (位)
四川	692.03	11.34	1	7.3	14
河南	654.80	10.73	2	7.0	16
安徽	443.05	7.26	3	6.9	17
広東	438.16	7.18	4	1.2	27
湖南	435.11	7.13	5	9.3	11
広西	404.60	6.63	6	12.6	8
江西	371.65	6.09	7	7.7	13
貴州	314.28	5.15	8	18.0	4
江蘇	296.58	4.86	9	1.3	26

湖北	270.34	4.43	10	6.6	18
重慶	217.25	3.56	11	5.3	21
山東	216.03	3.54	12	3.2	24
雲南	209.93	3.44	13	15.5	5
河北	198.94	3.26	14	5.6	19
陝西	147.07	2.41	15	13.0	7
甘肅	140.36	2.30	16	20.1	2
福建	125.71	2.06	17	1.8	25
浙江	116.56	1.91	18	1.1	28
山西	83.60	1.37	19	11.1	9
遼寧	56.14	0.92	20	5.1	22
黒竜江	51.26	0.84	21	5.1	23
新疆	49.43	0.81	22	18.6	3
吉林	37.23	0.61	23	5.4	20
内モンゴル	32.95	0.54	24	7.3	15
海南	23.80	0.39	25	8.5	12
青海	23.19	0.38	26	13.4	6
チベット	18.92	0.31	27	23.7	1
寧夏	12.82	0.21	28	10.8	10
上海	7.93	0.13	29	0	29
天津	6.71	0.11	30	0	30
北京	6.10	0.10	31	0	31
全国	6102.55	100.00		7.2	

出典：段・呂・郭・王 「我国农村留守儿童生存和发展基本状况——基于第六次人口普查的数据分析」(『人口学刊』 2013)、国家统计局住户调查办公室 『2015 中国农村贫困监测报告』(中国统计出版社 2015) をもとに筆者作成

国家統計局によると貧困発生率とは、所得または支出の水準が貧困ライン⁶に達しない層(=貧困者)が省の人口に占める割合である。現在使われている農村貧困ラインは、2010年に定められたもので、それによると、1人当たりの年収が2300人民元(約4万円)以下だと貧困層に分類される。国が所得による貧困ラインを定める理由は2つある。第1にその水準の所得によって、最低限の生活だけでなく、必要なエネルギーやたんぱく質を摂取することが可能になるからである。第2に教育、医療、住居など食事以外の最低限の社会生活を確保できるためである(国家统计局住户调查办公室 2015)。

⁶生活に必要なものを購入できる最低限の収入を表す指標。

中国国家统计局が全国 31 省（自治区⁷、直轄市⁸を含む）の 16 万戸の家庭に対して行ったサンプリング調査に基づいて算出された貧困発生率（表 1）からわかるのは、農村留守児童数が多い省が必ずしも貧困発生率が高いとは限らないという点である。例えば、貧困発生率が 20%以上で全国 1、2 位となっているチベットや甘肅省の農村留守児童の割合は全国的に見て高くない。反対に農村留守児童数が最も多い四川省、河南省、安徽省などの貧困発生率は 10%以下である。もちろん、農村留守児童数やそれが全国の児童数に占める割合は省の人口規模に左右されるため、農村留守児童数が少ないからといって、省の人口に占める割合が小さいとは言い切れない。また、国が 2012 年に公布した各省における貧困県のリスト⁹によると、同じ省の中でも県によって貧困発生率に違いがある。そのため一律にこの表だけから相関関係を論じることはできない。しかし、農村留守児童の多くが中国政府の定める貧困ライン以下で生活しているわけではない可能性をこの表が示唆している。それにもかかわらず、先行文献やマスメディアの報道では、困窮した家庭や貧困地域での悲惨な事件を取り上げる傾向にあり、それ以外のある意味で一般的な農村留守児童の実態を伝えていない可能性がある。そこで本研究では、経済的に非常に困窮した貧困地域ではない中国農村の留守児童の状況を明らかにすることを目的とする。それによって、これまでマスメディアで報じられず、あまり目を向けられてこなかった農村留守児童をめぐる課題を明らかにすることができるのではないかと考えた。

1.4 研究方法と問い

本研究では、中国の「非貧困県での農村留守児童が置かれている状況」を明らかにする。研究を進めるにあたり、まず中国の農村留守児童に関する先行文献をレビューし、農村留守児童の全体状況を整理する。先行研究の分析に基づき非貧困県に行き、フィールドワークを行う。本研究では中国政府が補助金を支給するために定めた貧困ラインを超えている県を「非貧困県」と呼び、非貧困県の中でもあまり困窮していない村や世帯を対象に参与観察とインタビュー調査を行った。具体的には湖南省澧県澧澗村を調査地とした¹⁰。結論を先取りすると、参与観察とインタビュー調査の結果、調査対象地の留守児童をめぐる状況

⁷自治区としては、内モンゴル自治区、広西チワン族自治区、チベット自治区、新疆ウイグル自治区、寧夏回族自治区が存在する。中華人民共和国の建国初期には、自治区という名の民族自治行政単位が多数存在したが、それらの多くは小規模なもので、行政制度が整うにつれ、多くが自治州と改称した。現存する 5 つの自治区はすべて省級の行政単位である。

⁸直轄市とは、最高位の都市であり、省と同格の一級行政区画である。現在、北京市、上海市、重慶市、天津市の 4 市がある。直轄市は市轄区と県を管轄する。重慶市にはさらに自治県が設置されている。直轄市は、一般的には省よりも面積が小さく、人口も少ないが、最も大きい重慶市は、小規模の省よりも広大である。地方の省の中には直轄市より人口が少ないものもある。

⁹「扶贫办发布“国家扶贫开发工作重点县名单”」（各省で援助を行う県のリスト）国務院ホームページ（http://www.gov.cn/gzdt/2012-03/19/content_2094524.htm 閲覧日 2016 年 12 月 22 日）

¹⁰ この村を調査対象とした理由については第 3 章で詳しく述べる。

は新聞報道や先行文献で述べられているほど酷い状況ではなかった。しかし、留守児童が抱えている精神的な苦痛についてはこれまで指摘されていたような困難な状況にあった。そこで、次に留守児童が抱える精神的な苦痛に焦点を当て、大人になった後、留守児童時代の精神的な悩みがどのような影響を及ぼしたかを20代半ばを過ぎた元留守児童にインタビュー調査した。

1.5 論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。第2章は、農村留守児童がどのような背景で生まれ、増加していったのかを政府の報告書や先行研究からひもとく。また、中国農村留守児童に関する先行文献をレビューした結果を、留守児童の家庭や学校での課題、犯罪被害や不慮の事故に遭うリスク、犯罪加害者となる背景、及び留守児童たちが抱える心の悩みといった観点から整理し、先行研究を批判的に考察する。第3章では、湖南省の非貧困県である澧県の澧澗村での調査をもとに、先行研究と比較した留守児童が置かれている状況や抱えている問題の分析を行う。その結果として、留守児童が抱える心の悩みを研究する重要性を指摘する。第4章は、すでに20代半ばを過ぎた元留守児童に行ったインタビュー結果をもとに、留守児童の経験が、成人後に至るまで与えた影響について明らかにする。その際、留守児童を経験したことが、自らが親になった際の子育てや家族のあり方への考え方にどのような影響があったかも考察する。最後に第5章で本研究の問いに対する結論及び研究の意義と限界について述べる。

第2章 農村留守児童を取り巻く状況

前章におけるマスメディアの報道を中心に考察した農村留守児童問題の深刻さを踏まえ、本章では、先行文献レビューをもとに、まず農村留守児童の発生と増加の背景を説明し、留守児童の問題について、学校に係る問題、家庭に係る問題、犯罪被害と不慮の事故、犯罪の加害者になる問題、精神的な影響という5つの側面から具体的に論じる。

2.1 農村留守児童の発生と増加

本節では、中国の農村留守児童がどのように発生し増加していったのか、その背景要因を含めて分析する。

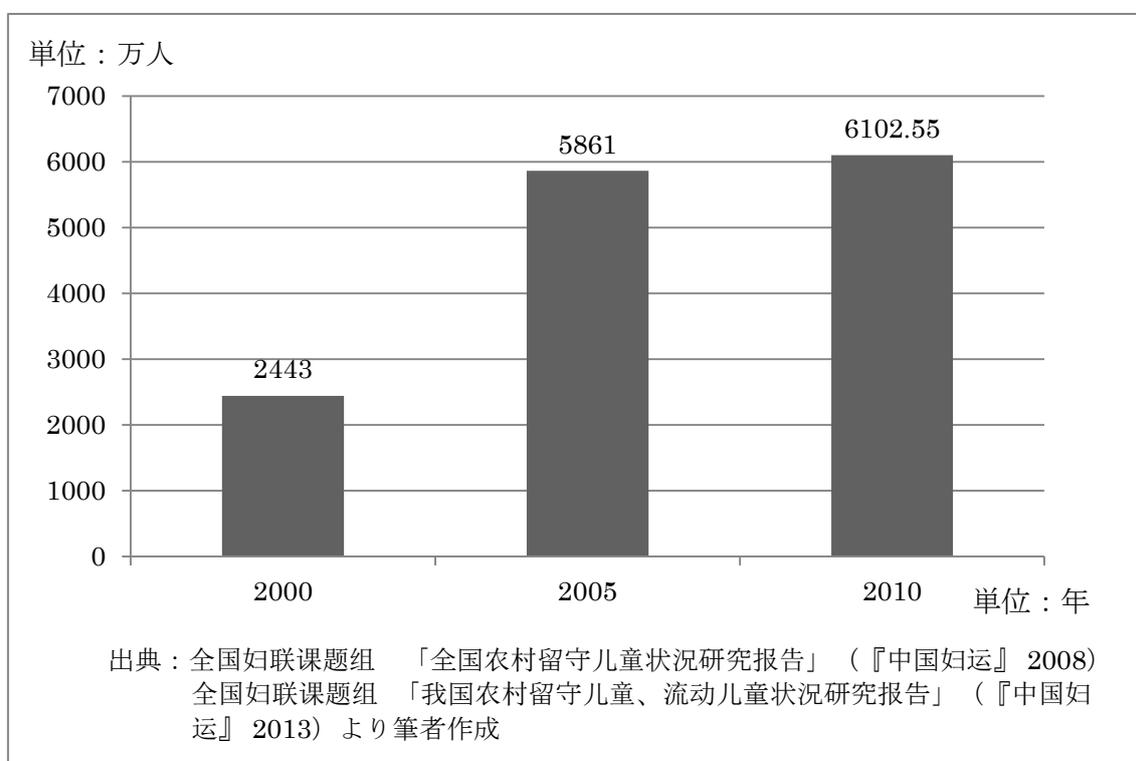


図1：2000年～2010年の全国農村留守児童数

図1は、中華全国婦女連合会の調査をもとにした全国の農村留守児童数を表したものである。2000年と2010年は全国規模の人口調査、2005年はサンプリング調査に基づく数値である。それによれば、2000年から2005年までの5年間に、中国の全国農村留守児童は3418万人増加し、約2.4倍になった。2005年からの5年間では増加率はかなり減少したが、約250万人増加して6100万人を超えた。21世紀に入ってからのこうした変化の原因を説明する前に、1970年代末の改革開放から2000年までの農村留守児童発生の「前史」を先行研究をもとに明らかにする。

農村留守児童が発生した主な原因は農村部から都市部への労働人口の移動である。農村

戸籍を持ち、農村から都市や郷、鎮¹¹で出稼ぎする農民は農民工と呼ばれる。出稼ぎの原因の1つは農村の過剰な労働力である。1978年まで、都市人口は全人口の18%程度に過ぎず、人口の82%、約8億人は農村で暮らしていた（李 2011）。中国は人口が多く、耕作適地が少ないため、農村で労働力が過剰な状態であった。1984年時点で、中国の農村には9500万人近い過剰な労働力があつたとされている（段 1998）。その頃は、「二元戸籍制度」¹²によって、農村と都市の間の人口移動が厳しく制限されていた。そのため、農村で労働機会がなかったとしても、仕事を求めて自由に都市へ移動することはできなかった。そこで、農村の大量の労働力は農村内部で農業分野から非農業分野へ転業し、主に郷鎮企業¹³で働いた（張・黄 2008）。出稼ぎとはいえ農民工が家に近い郷や鎮で働いたので、長期間家から離れることはほとんどなかったため、農村留守児童は深刻な問題にはならなかった。しかし、80年代末以降、政府は経済発展のため、人口移動に対する制限を緩和したため、「民工潮」¹⁴と呼ばれる大勢の農民が都市に移動する事態が発生した。また、1992年に、鄧小平の「南巡講話」¹⁵によって、上海、北京など大都市の経済発展が促進され、農民工の出稼ぎ

¹¹中国の地方自治体は、簡略化すると「郷・民族郷・鎮→県・県級市→地区級市→省・直轄市・自治区」の階層となっている。「郷・鎮」は農民が属する基層の自治単位であり、その上位組織として県・県級市、地区級市があり、地方の最上位の自治体が省・直轄市・自治区である（鎌田 2010：52）。また、郷・民族郷・鎮の政府は農村地域を管轄する最下部の地方政府である。（チャイナネット <http://www.china.com.cn/ch-zhengzhi/zhengzhi6.htm> 閲覧日 2017年1月1日）

¹²中国では建国初期に都市に流入する大量の農民による社会混乱が深刻になり、いくつかの試験的な試みを経て1958年「戸籍管理条例」を制定し、国民を「農村戸籍」と「非農村戸籍（都市戸籍）」に分けた。農民を農村に留まらせ農業に専念させ、都市の住民は都市戸籍を持つ市民に限定した。それにより、物資の配給と彼らを管理する仕組みを作ること社会治安の安定を維持していた。（JapanKnowledge Lib <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=50010D-112-0068> 閲覧日 2016年12月23日）。

¹³郷鎮企業とは、農村集団経済組織または農民の出資を主として（出資が50%を超えるか、実質的に農民組織が支配する）、郷鎮（所轄の村を含む）で設立された企業で、農業支援を義務とする各種の企業のことを指す（1997年1月1日から実施した中華人民共和国乡镇企业法（中華人民共和国郷鎮企業法）の第2項）。（国務院ホームページ http://www.gov.cn/banshi/2005-06/01/content_3432.htm 閲覧日 2017年1月4日）

¹⁴中国の農村地帯から広州、上海、福州など沿岸部の大都市に向かう出稼ぎ農民の大移動を指す。農民の出稼ぎは1980年代後半から盛んになり、当初は無秩序な都市への流入は「盲流」と呼ばれたが、ここ数年は改革・開放路線による経済発展に伴う必然的な現象として定着し、呼び方も民工潮と変わった。（ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 <https://kotobank.jp/word/%E6%B0%91%E5%B7%A5%E6%BD%AE-158164> 閲覧日 2016年12月23日）

¹⁵最高指導者だった鄧小平が1992年初頭に湖北省・広東省・上海など中国南部地域を視察した際、各地で改革開放の加速を呼びかけたことを指す。天安門事件以降低迷していた中国の経済はこれをきっかけに活性化し、市場経済化・グローバル化が進んだ。（デジタル大辞泉 <http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001025091300> 閲覧日 2016年12月23日）

場所も郷鎮から大都市に変わった（段・楊・馬 2012）。一方、農村で第一次産業の収入の増加率が伸びなくなること、農民の負担が重くなり、都市部への出稼ぎ意識が強くなった（李 2011）。2000年には全国の人口移動の数が1億229万人に達した（段・楊・馬 2012）。農村の自宅から遠く離れた都市で長期間出稼ぎする農民工が増加するにつれて、農村に残され長期間親と会えない留守児童が多く見られるようになった。

2000年以降、沿海部を中心に都市部の経済が発展するにつれて、都市の製造業、建築業、サービス業などの業界で急速に労働需要が高まった。例えば、2001年から2007年まで、北京では出稼ぎ者に対して企業や工場などが出した求人数は198.2万人から297.1万人までに増加した。こうした変化に対応するため、政府は農民工の都市での就業と居住に対する条件を緩和した（段・楊・馬 2012）。以前は、農民工の大量流入が、都市住民の就業や居住に悪い影響をもたらしたため、政府は都市住民を優先し、農民工が都市で従事できる仕事を、労働条件が厳しく給料が低い非正規部門の仕事に限定していた（李 2011）。しかし、中国政府の最高行政機関で内閣に相当する国務院は2003年1月に農民工に対する仕事の制限をなくし、農民工と都市の住民を平等に扱う政策を打ち出すとともに、農民工の都市での社会保障制度、医療保障制度などを改善した（段・楊・馬 2012）。一方、農村の人たちの出稼ぎ意識にも変化が生じた。出稼ぎの仕事は主に親戚や村人の紹介に頼るため、農村に残っている人々は出稼ぎで農民工が多額の収入を得ていることを知っている。また、知り合いの紹介を通じて都市の仕事はすぐに見つけられるため、自分も出稼ぎに行きたいという気持ちを抱くようになった（范・且 2002）。以上のように、都市で労働力の需要が増え、制度が改革される一方、農村での出稼ぎ意識の高まりが、2000年以降の農民工の急速な拡大と、その結果としての農村留守児童の大幅な増加を生んだといえる（図1参照）。

2005年以降は、農民工に対して、就業と居住に係る権利の保護、労働賃金と医療や労働災害保険の保障、労働条件の改善などの制度が整備されるとともに、農民工の都市での就業と居住が徐々に安定するようになった（段・楊・馬 2012）。その結果、都市部に出稼ぎに行く親と一緒に出稼ぎ先で暮らす「流動児童」¹⁶が増えた。

¹⁶出稼ぎ先の親と一緒に戸籍所在地以外の場所で半年間以上生活・就学する18歳以下の児童を指す（新公民計画 2014年9月）。

http://blog.xingongmin.org.cn/?page_id=702 閲覧日 2017年1月2日

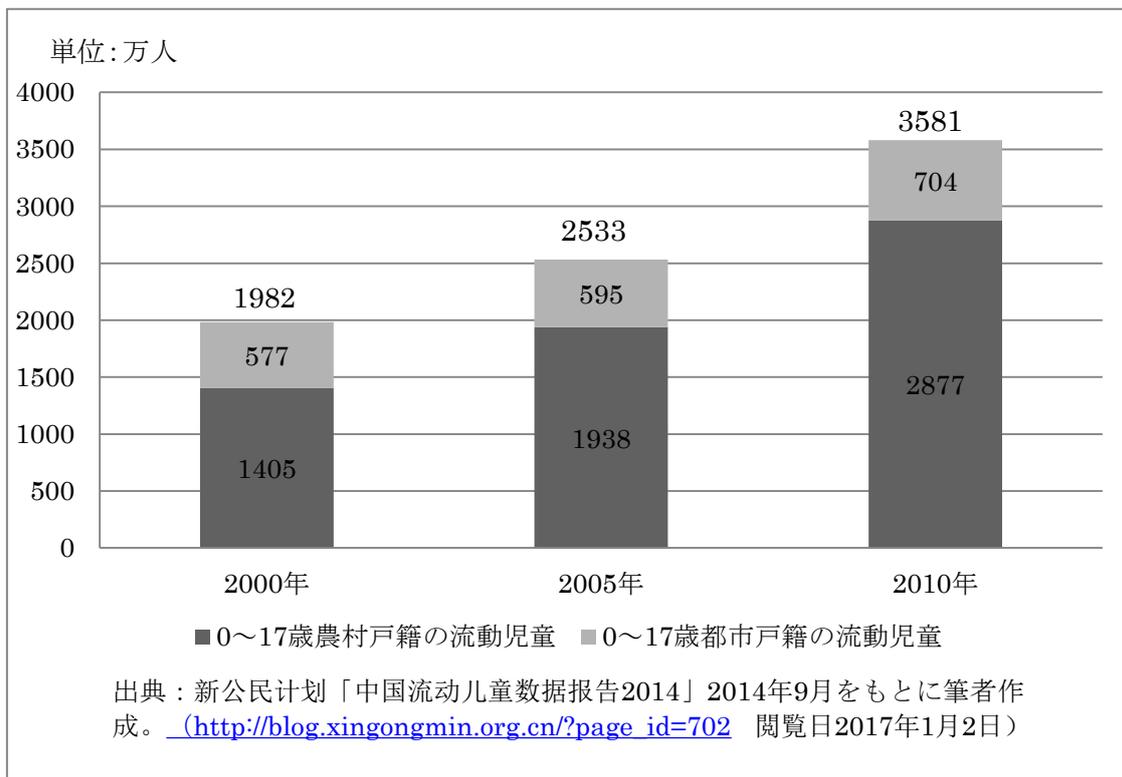


図 2：2000 年～2010 年の全国流動児童数

図2は、2000年から2010年までの全国の18歳以下の流動児童の数を表したものである。この10年間に、流動児童の規模は1982万人から3581万人に約1.8倍に増加した。特に農村戸籍の流動児童は継続的に全体の70%以上を占めている。農村戸籍の流動児童数は、2000年から2005年までで533万人、2005年から2010年まで939万人増加した。2005年以降の5年間の増加数はその前の5年間の1.8倍に近い。

この間、政府は都市で出稼ぎする農民工に対する補助を行うと同時に、農民工と暮らしている流動児童への対応を改善し始めた。国務院は2008年に「国务院关于解决农民工问题的若干意见」（農民工問題の解決に関する国務院の若干の意見）（以下「意見」という）¹⁷を発表した。「意見」の第21項により、農民工が流入する都市の政府に対して、国は農民工の子女が都市で教育を受けられるよう次のようなことを要求した。

農民工が流入する地域の地方政府は農民工子女の義務教育の責任を負い、全日制の公立学校を主として、農民工子女を受け入れる。また学校の在学の数によって、政府から経費を補助することがある。また、地方政府は、農民工子女の義務

¹⁷ 「国务院关于解决农民工问题的若干意见」 2015年6月13日 国務院ホームページ
http://www.gov.cn/zhuanti/2015-06/13/content_2878968.htm 閲覧日2016年12月23日)

教育を行う民弁学校¹⁸に対して、教育にかかる経費や教員の研修などのサポートと指導を行い、教育の質を向上させる（筆者訳）。

また、2006年6月29日に改正された中华人民共和国义务教育法（中華人民共和國義務教育法）¹⁹の第12項には次のようにある。

親または法定後見人が戸籍所在地以外のところで就業や居住する場合に、親または法定後見人と一緒に暮らしている義務教育を受ける児童に対して、地元の政府は平等的な義務教育条件を提供するべきである（筆者訳）。

この法改正によって政府は流動児童の都市での就学を保障した（呉・朱 2011）。

このように、都市部での労働力不足を背景に、農民工の都市での生活基盤が安定し、農民工の子女教育に対する保障を強めたため、出稼ぎする親と一緒に都市で生活し都市の学校に就学する流動児童が増加し、農村留守児童の増加率はほぼ横ばいになったと考えられる。しかし、増加率は減少したとはいえ、2005年以降も、農村留守児童数の増加は続いている（図1参照）。

2.2 留守児童に影響を与える後見人

農村留守児童に関する先行研究は、前節で述べたような留守児童数の変化と政治経済などマクロ面での背景について論じたもの以外に、留守児童を取り巻く社会問題を取り上げている。本章の冒頭で述べたように、学校に係る問題、家庭に係る問題、犯罪被害と不慮の事故、犯罪の加害者になる問題、それに留守児童の心に及ぼす影響という5つの側面から整理する。本節では、まず、家庭、すなわち、農村で残された留守児童の面倒を見る後見人との関係から生じる問題について論じる。

すでに述べたように、農村留守児童の後見人には4つのパターンがある。

第1に、両親のどちらかが出稼ぎに行き、どちらかが農村に残って後見人となる場合がある。このケースでは親の両方が出稼ぎでいない留守児童より、問題はあまり深刻ではないが、家に残って子どもの世話をする片方の親は1人で家事と農作業を行うとともに、子

¹⁸民弁学校は、国家機構以外の社会組織や個人が、非国家財政の経費を利用し、設立する学校や他の教育機構を指す（中华人民共和国民办教育促进法实施条例〈中華人民共和國民弁教育を促進する法律〉の第2項 2008年3月28日）。国務院ホームページ（http://www.gov.cn/zhengce/content/2008-03/28/content_5674.htm 閲覧日 2016年12月23日）

¹⁹中华人民共和国义务教育法（中華人民共和國義務教育法） 2006年6月30日 国務院ホームページ（http://www.gov.cn/flfg/2006-06/30/content_323302.htm 閲覧日 2016年12月23日）

どもの世話をし、教育する責任を負っている。そのため、多大なストレスにさらされ、子どもに対して、暴力や叱責を伴うやり方で教育しがちだという。その過程で、親も自分の焦燥感を無意識に子どもに伝えてしまうため、子どもの成長にマイナスの影響を与えると指摘されている（黄 2013）。

第 2 に、親の両方が出稼ぎに行き、留守児童の祖父母が後見人となる場合である。この場合、留守児童は主に健康・衛生と学業の面で厳しい問題を抱えている（肖 2012）。健康・衛生面については、普段の食生活が祖父母の好みに偏り、子どもの栄養バランスをほとんど考えていないと指摘されている（ibid.）。例えば、貴州省農村留守児童を調査した肖（ibid.）は貴州省の貧困県の 1 つである册亨県で、ある留守児童家庭を調査した。この留守児童は祖父母と暮らしており、調査当時小学 3 年生だったが、同じ年齢の子どもと比べ、背が低く、体が痩せているように見えた。この留守児童の毎日の昼食は水煮野菜だった。留守児童は昼までに授業が終わるが、祖父母は農作業で家に帰れないため、残りものの冷たいご飯を食べさせざるをえない。このような食生活は、蛋白質などの栄養が不可欠な成長段階にある留守児童にとって、健康的な成長の妨げになるだけでなく、体力不足から病気を患う可能性もある（ibid.）。また、留守児童ではない子どもより、留守児童の衛生状況がさらにひどいという調査結果がある。特に留守児童の男児は、汚い服を着て、顔も洗わないままに、学校に行く場合がよく見られる（ibid.）。留守児童の健康・衛生状況がひどい原因について肖（ibid.）は、高齢の祖父母の場合、家事と農作業で疲れきってしまい、こまめに洗濯したり、子どもの洗顔を気にかけてりする余裕も体力もないからだと分析している。栄養不足や不衛生な服装によって、留守児童はそうでない児童よりも病気にかかりやすい傾向にあり、病院で診察を受ける割合も高いという研究もある（宋・張 2009）。

学業については、叶ら（2006）が、陝西省、河北省、寧夏自治区、北京市²⁰の 10 村を選び、161 人の留守児童、102 人の非留守児童に対するアンケート調査、及び留守児童の後見人や学校の教員に対するインタビュー調査を行っているが、その結果によると、留守児童の成績は親が出稼ぎする前の時期と比べ下がる傾向がある。中国では、特に子どもが小さいうちは両親が家で勉強の手助けをするが、農村留守児童の祖父母は小学校卒業の学歴しかないことが多いため、子どもの勉強をみてあげることができないことがその一因だと指摘されている（叶・王・張・陸 2006）。また、祖父母による留守児童のしつけをテーマに研究した王によると、後見人である祖父母は留守児童に対して暴力を振るったり、あるいは無関心であったりする傾向が強い。その結果として、留守児童は学業への意欲を失ったり、家で勉強しないでも注意する大人がいないため遊んでばかりで学業が疎かになったりするケースが指摘されている（王 2013）。前述したように、高齢の祖父母は農作業と家事をこなすだけの体力がないため、その点では留守児童の助けが必要である。家の手伝いをしなければならない留守児童は、自宅での勉強時間が少なくなり、学業との両立が難しい。貴州省の留守児童の教育状況を調査した謝ら（2010）は国が貧困県に指定する貴州省務川県

²⁰ 「市」については脚注 11 参照。

のある学校教員の話を用いて以下のように書いている。

クラスの中で、半分以上は留守児童です。これらの留守児童はほとんど祖父母と暮らして、毎日柴刈り、牛飼などの家事を行うため、宿題をする時間がなく、授業中は眠そうにしており、集中できていません（謝・申・陈 2010：73、筆者訳）。

第3に、親の両方が出稼ぎに行き、親戚や親の友人が後見人となる場合である。このタイプの留守児童はあまり多くない。親戚や親の友人は留守児童の生活費の負担が大きいいため、留守児童の世話を引き受けたいと思っていない。それでも後見人を引き受けるのは、その留守児童の親とかなり親しくして断りにくいケースに限られる（卢・冷 2014）。農村留守児童と後見人との間の問題を研究した黄（2013）の分析によると、親戚や親の友人が後見人の場合は、体力や知識の面では問題ないものの、後見人の実子との関係で難しい点があるという。長年一緒に暮らしてきた実子とは違い、留守児童が何か問題を抱えていたとしても、すぐに気づかないことがある。育て方に迷いがある上に、厳しく教育し過ぎると、周りの人や留守児童の親に虐待だと誤解されることもある。親戚や親の友人にとっては、留守児童に対するしつけの加減が難しい（黄 2013）。

第4に、親の両方が出稼ぎに行き、留守児童の兄弟姉妹の中で年長者が保護者になる場合である。これには2つのケースがある。1つは、両親とも出稼ぎに行っていて、留守児童の面倒を見られる祖父母や信頼できる親戚などがいない場合。もう1つは、同じような境遇ではあるが、平日は学校に寄宿し、週末だけ家に帰って留守児童だけで生活するケースである。学校で寄宿する平日は、年長の兄姉だけでなく学校の教員も弟妹の面倒を手助けしてくれる。このタイプの留守児童は、誰も後見人がいないという意味で一番状況が厳しいといえる。保護者となった年長の兄姉は弟妹の面倒を見ると同時に、家事や自給自足のための農業²¹をしなければならない。黄（2013）によれば、年長の兄姉は弟妹の面倒、学業、家事、農作業と多くの役割を担わなければならない自分の勉強の時間を確保することが難しくストレスがたまりやすい。年長者とはいえ、同じ留守児童であり、弟妹が何か問題を起こしたとしてもうまく指導することは難しい（ibid.）。

2.3 農村の学校特有の問題

農村留守児童の問題を学校教育の側面から研究した先行文献には、留守児童の学校生活それ自体に目を向けたものと、中途退学問題を扱ったものがある。本節ではこの2つの側面を取り上げる。ただし、その前提として中国の農村における学校教育一般について説明をする必要がある。そうでなければ、留守児童特有の問題と農村の教育全体にイえる問題を区別することができないからである。

²¹農村で、肉、米などは近い鎮での市場で買うが、野菜のような長期間保存できない食べ物は、自給自足のために家の畑でまかなうというのが一般の状況である。

まず、農村の学校の全体状況から考える。

稲井（2011）が行った中国の陝西省安塞県楼坪郷での調査によると、校舎や施設の老朽化、敷地面積の狭さなどの学校の施設の問題がある。

ヤオトン²²校舎の教室には電灯さえなく、ガラスの割れた窓からは隙間風が吹き込む。学習机は大人サイズで、教壇に立つと、机の上にわずかに出ている児童の顔と、机の下からブラブラさせている足だけが見える。教室には、石で作られた黒板と小さくちびたチョークの他には、石炭ストーブしかない（稲井 2011：56）。

また、農村の学校の衛生状況については、張ら（2009）が安徽省合肥市の農村にある 981 の小・中学校を調査した。その結果によると、トイレの水を流す設備がついている学校は 14.3% しかなく、84.4% の学校はトイレに手を洗う場所がなかった。安徽省合肥市では農村の学校のトイレの衛生状況が全体的に厳しいと指摘されている（張・張・李・王 2009）。

農村の学校教員をめぐる共通した課題は、教員数が足りていないという点である。農村の生活環境が厳しいため、農村地域で勤務したい教員が少ない（謝 2006）。農村の学校では「代課教師」²³（代用教員）という非正規教員を雇用している（阿古 1996）。代課教師の大半は、高校卒業程度の学歴しか持たず、教員になるための専門教育を受けていない。2001 年には国務院が「国务院关于基础教育改革和发展的決定」（基礎教育の改革と発展に関する決定）を公布し、代課教師を整理、解雇する方針を出した²⁴が、農村の貧困地域の学校では、代課教師は依然として少なくない。その理由は 2 つある。1 つ目は、正規教員より代課教師の給料はかなり低いため、学校の財政負担を軽くできること、もう 1 つは、農村の勤務条件が悪いため、配属されてもすぐ辞めてしまう正規教員が多いことが背景にある。それに比べて地元出身の代課教師は長く働き続けるため、学校や児童の家庭が抱えている問題を把握し、適切に対処できるという指摘がある（稲井 2011）。

農村の学校に関わる一般状況として、寄宿舎の不足を挙げることができる（謝・申・陈 2010）。前述したように、農村留守児童の中には大人の後見人がおらず、平日は学校の寄宿

²²安塞県は、西安市から北へ約 400km、延安市の東に位置する。いわゆる黄土高原と呼ばれる地域で、年間降雨量はわずか 400mm。夏の最高気温は 36℃、冬の最低気温は -24℃と、自然環境は極めて厳しい。人々は、黄土高原の山崖に横穴を掘ったヤオトンと呼ばれる洞穴式住居に暮らしている。ヤオトンの室内は、夏は涼しく、冬は暖かく、この黄土高原の厳しい自然環境に適合した住居で、いわば、人々の知恵が生み出した住居といえる（稲井 2011）。

²³代課教師は、民弁教師ともいう。小学校から高校において、教師を務めているが、正式な教員定数の枠に入らない教師である。民弁教師になるには、一般的に中学校卒業が必要で、教育行政部門によって推薦され、県の教育行政部門が審査・採用する（鮑 2002）。

²⁴「教育部召开新闻发布会介绍近期教育改革发展情况」（教育行政部門による教育改革の発展状況に関する説明） 2006 年 3 月 27 日 国務院ホームページ

（http://www.gov.cn/xwfb/2006-03/27/content_237660.htm 閲覧日 2016 年 12 月 23 日）

舎で生活をしているケースがある。しかし、そうした設備を持っている学校は少ないため、児童は毎日家から登校せざるをえない。農村は山道が多く、交通機関もないため、家と学校を歩いて往復せざるをえない。通学時間が数時間という児童もいる。加えて、寄宿舎は通常食事を提供するが、こうした学校では給食も出ない。貴州省の留守児童を調査した肖（2012）によると、貴州省のある村では児童たちは片道 2 時間かけて学校に行くが、大部分の児童は午前 10 時から授業を始め、昼は何も食わずに午後 3 時頃まで授業を受け、その後再び 2 時間歩いて帰宅するという（ibid.）。農村の学校には寄宿舎が不可欠だが、現状では中学校に偏っていて、寄宿舎のある小学校は非常に少ない（高・朱・卢 2013）。寄宿舎制度は農村の児童全体にとって大きな問題ではあるが、特に親がそばにおらず、家事や農作業の手伝いをしなければならない留守児童にとって、より深刻な問題であることは明らかである。寄宿舎があれば、子どもの毎日の通学時間を省き、学校での自習の時間を増やせる上に、教員は子どもの勉強をみてあげられる。それによって、後見人が留守児童の学業を助けられないという問題を解決できる。また、留守児童が通学途中で事故や犯罪に遭う危険性をなくすことにつながる。そのため寄宿舎制度は留守児童にとって極めて重要だといえる（李・任 2009）。

農村の学校が置かれている状況については以上の通りである。児童にとって学業の障害になるような一般的な条件が農村には存在しているが、そうした障害は留守児童にとってはより大きな困難であることは想像に難くない。こうした状況に加えて、先行研究が留守児童の学校生活上の問題として指摘しているのが、留守児童の学校での態度や行いである。農村留守児童の学業面での問題を分析した黄（2013）によれば、留守児童は自分で宿題をやらず、他のクラスメートの宿題を写したり、宿題を時間通りに出せなかったり、授業に集中できなかったりする。また、学校でわざと教員に反発し、教員に叱られても気にしない、学校のルールを守らない、遅刻をしたり、授業を無断で欠席したりする、うそをつく、他の児童をいじめるなどの行為が指摘されている（刘・李・刘 2008）。こうした問題行為は、留守児童以外にもありうることだが、刘らの研究では、留守児童に顕著に見られるとのことである。また、学校と留守児童の家庭のつながりが薄いため、教員は留守児童の学校での状況を後見人や出稼ぎ先の親に伝えられていない。なぜなら、後見人の多くは子どもの教育の責任は学校にあると考え、それ以上の関心を持たないからである（陈・朱 2013）。

もう 1 つの深刻な問題は、留守児童の中途退学問題である。留守児童は他の児童と比べて義務教育段階の中途退学率が高い。2001 年に、中国政府は農村児童の不就学、退学の問題を解決するために、「両免一補」²⁵（2 つの免除と 1 つの補助）政策を実施した。2007 年までに義務教育を受けている農村の貧困家庭の児童はこの政策に基づき国の補助を受けた。

²⁵中国政府が農村義務教育段階（小・中学校）における貧困家庭の児童・生徒に対して実施した援助政策である。2 つの免除とは、雑費と教科書代の免除で、1 つの補助とは、寄宿舎に居住している児童の生活費の補助である。国务院ホームページ

（http://www.gov.cn/banshi/2006-09/04/content_376956.htm 閲覧日 2016 年 12 月 24 日）

その結果、農村児童の就学率は高くなったが、中途退学の問題は依然深刻である。特に、学年が高くなるにつれて、留守児童の中途退学率が高くなり、中学校段階の留守児童の退学問題が最も深刻である（陶 2007）。江西省での聞き取り調査をもとに農村留守児童の中途退学問題を研究した陶（2007）によると、これまで述べてきたような様々な要因が重なり成績が伸びない留守児童は、勉強に対する関心を失い、さらに進学率を追求する一部の学校は成績の悪い留守児童を放置するため、高校に進学しない留守児童は勉強を続ける意欲を持たず退学につながりやすいという。留守児童の中途退学問題は、必ずしも経済的な問題だけが起因しているわけではないが、経済的な問題に因るところも大きい。黄（2013：166頁）によれば、「農村では、大学まで進学できる子どもが少ないため、継続が難しい学業より、早く出稼ぎしたほうがいい」という考えを持っている親や祖父母が多く、親は子どもに対して、「健康に成長し、将来都市へ出稼ぎに行き、お金を稼ぐ」ことを期待している。留守児童も親の考えに影響され、「自分の親の学歴は低いから、出稼ぎに行つたためたくさんのお金を稼げた。勉強よりも出稼ぎによって貧困の問題を解決できる」と考える傾向にある（謝・申・陳 2010：85頁）。留守児童が義務教育を中途退学した場合は、ほとんどが親と同じように出稼ぎの道を選び、長期間都市の工場などで肉体労働に従事することになる。その結果、元留守児童が出稼ぎに出て、次の世代の留守児童を生むという悪循環に陥る可能性がある。この点については、後で改めて触れる。

2.4 留守児童を取り巻く危険

前の 2 つの節では家庭と学校という「場」に着目して農村留守児童の現状と問題点を論じた。本節以降は、「場」にこだわらず、留守児童が直面している「問題」に目を向けて先行研究を整理する。まず本節では、マスメディアの報道でしばしば取り上げられるような不慮の事故や性暴力の被害について、その実態や背景を貴州省の農村留守児童の実態を調査した肖（2012）の研究をもとに論じる。

不慮の事故や性暴力被害の原因の 1 つは、後見人が農作業で忙しいため、留守児童が 1 人で家にいることが挙げられる。後見人がそばにいないため、子どもは不慮の事故に遭いやすい。例えば、留守児童が自炊をする時、後見人は事故が起きないかどうか常に子どもを見ているわけにもいかず、留守児童自身がガスや火の使い方をよく知らないため、火事を起こしやすい。また、女児の留守児童は 1 人で家にいる場合、性的被害に遭うこともある。守ってくれる後見人がいないだけでなく、留守女児自身の警戒心が高くないため、不審者に騙されやすく、脅されやすい。さらに、事故や事件が発生しても、特に小学生の留守児童であれば、まだ臨機応変に行動する能力が高くないので、身の安全を考えて適切に対応することが難しいと肖は指摘している。

もう 1 つは登下校に関わる要因である。農村は道路幅が狭く信号機もないため、車が留守児童を避けにくく交通事故に遭うケースが多い。また、留守児童は後見人が登下校の送迎に来ないことが多いため 1 人で登下校する機会が多い。その結果、事件や事故に遭う危

険性が高い。また、通学途中に留守児童が性的被害に遭うケースも少なくない。なぜなら、農村の人口が少なく、林のような人目につかず隠れやすい場所が多い上に、登下校の途中は後見人からの保護がないため、加害者にとって犯行しやすい状況があるからである（張・耿 2016）。

以上のように、肖（2012）は貴州省の調査に基づいて、農村留守児童が不慮の事故や性暴力の被害者になる理由を後見人と登下校の面から説明した。後見人に関わる要因については別の側面からの指摘もある。農村留守児童の安全問題を調査した張らは、安徽省の農村留守児童 763 人及び後見人を対象にした調査の結果、70%以上の後見人は、子どもの日常生活と学校の成績しか重視していないと指摘している。出稼ぎの親は子どものそばにいないため、子どもが何か危険なことをした時、すぐに注意できない。親や後見人は、普段子どもとコミュニケーションする時、主に子どもの学業と食事という生活の側面が話題の中心なので、子どもの安全問題は無関心な状態にある。例えば、通学途中は車に気をつけるべき、1人でガスや火を扱ってはいけないなど注意やしつけを含むコミュニケーションがあまりない。また、後見人は高齢で、かつ忙しいなどの原因で、交通事故の恐れなど子どもの周りの危険を軽視する場合がよくある（張・王 2012）。また、肖は特に注目しなかったが、学校での安全教育の問題を指摘する研究もある。具体的には、火遊びはしてはいけない、1人で川辺で遊ばない、通学途中に車とすれ違う時は車を先に行かせる、などについて児童に十分な指導や注意を与えていない（胡・王 2012）。留守女兒が受ける性的被害の問題を研究した李（2008）は、留守女兒が性的被害を受ける原因の 1 つに、農村の居住環境を挙げている。農村は家同士が離れている上、出稼ぎの増加で働き盛りの年代が都市に流出したため、地域での防犯機能がほとんど働かない。不審者の侵入にも気づかないし、留守女兒が被害を受けた時に大きな声で助けを求めても誰も聞こえない。この点に目を付けた不審者や加害者によって農村の留守児童が被害に遭ってしまう。

2.5 留守児童が加害者となる犯罪

留守児童が加害者となる犯罪について、先行研究は主に犯罪の特徴とその原因を論じている。

犯罪の特徴については、第 1 に、強盗や窃盗が大部分を占めている。広西省賓陽県の公訴部門の統計データによると、2008 年から 2012 年までに起訴された農村留守児童のうち、強盗が 53%、窃盗が 35%、暴力を伴うかどうかはともかく他人のモノを盗む犯罪が 90%近くを占めている（韦・朱・宁 2014）。第 2 に、留守児童の犯罪は主に集団で行われることが多い。江西省のある県²⁶における農村留守児童の犯罪に関する資料を分析した黄（2013）によると、2010 年から 2012 年まで、農村留守児童に関する 127 件の犯罪事件のうち、集団で犯罪をした事件は 72 件で、全体の 56.7%を占めたという。第 3 の特徴は農村留守児童の再犯率が高いことである。2001 年から 2007 年まで、徐州市の中級人民裁判所で審理さ

²⁶この県について、黄（2013）は具体的な県の名前を挙げていない。

れた未成年犯罪の事件で、農村留守児童の再犯率は、他の未成年より、明らかに高いというデータがある（張・魏 2010）。

次に、留守児童がこうした犯罪を起こす原因について、家庭、学校、社会の 3 つの側面から先行研究を整理する。

家庭に起因するものとしては、出稼ぎの親と後見人から捉えた研究がある。出稼ぎの親に着目した王（2010）は、親は子どもと一緒に暮らせない申し訳ない気持ちをお金で償っている面があると指摘する。留守児童は親や後見人からお金を無駄使いしてはいけないなどの注意やしつけを十分に受けていないため、親からの仕送りで余分なお金を持った留守児童は無駄使いをしてしまう。浪費癖がついた留守児童は、親からの仕送りを使い切ってしまった後に抑え切れない物欲を満たすために、窃盗などの犯罪をおかす場合がある（王 2010）。後見人に目を向けた董・李（2010）の研究によれば、祖父母が後見人の場合、高齢でかつ農作業と家事をしなければならぬため、子どもを常に気にかけてたり世話をしたりする余裕や体力はない。また、祖父母と留守児童には年齢差ゆえの世代間の差異があるためお互いに理解し合えず、コミュニケーションが少なくなる。その結果、子どもが起こした行動に間違いがあっても祖父母はすぐには気づきにくい（*ibid.*）。親戚や親の友人が後見人の場合は、前述したように留守児童に対してどのような態度で接しているのかわからず、問題を感じたとしてもあまり厳しく接しない傾向がある。年長の兄姉が保護者代わりの場合は、兄姉自身もまだ善悪の判断力がつかず、弟妹の留守児童に適切な助言や指導をすることが難しい。そのため、このタイプの留守児童は犯罪率が一番高い（*ibid.*）。

学校の側面から考えると、農村の小・中学校は、子どもの進学率を重視するため、成績がいい子どもは教員に重視される。しかし、成績が悪い子どもは、教員に気かけられず、無視される場合もある。成績がいい子どもは「犯罪は自分の学業に影響を与える」という考えを持っているため、犯罪行為を避けることがある。一方、成績が悪い子どもは、教員の無関心により、自分の将来に自信がなくなり、自暴自棄になり、自分の行動をコントロールできない傾向にある。また、親、後見人と教員からのしつけが欠如しているため、子どもは自分の行動をコントロールできず、いわゆる不良少年に影響されやすく、犯罪に走る可能性が大きい（黄 2013）。

社会的な環境から考えると、犯罪を起こす留守児童は中学校、高校段階に集中している。黄（2013）によれば、江西省のある県では、2010年から2012年まで、犯罪を起こした農村留守児童のうち14～16歳の留守児童は47.6%を占め、16～18歳の留守児童は50.7%を占めたと指摘する。范（2006）によると中国では改革開放以降、中学校・高校が主に村に近い郷や鎮に建てられたという。つまり、犯罪を起こす農村留守児童の大部分は郷や鎮の中学校・高校に通っていると考えられる。郷や鎮には一般的な村と違って学校の周囲にネットカフェ、パチンコなど遊戯施設が多く、娯楽のためのお金を必要として留守児童が窃盗や強盗といった犯罪に手を染めてしまうと指摘されている（刘 2007）また、中学校・高校段階の留守児童が授業をさぼるといった比較的小さな問題行動から犯罪につながってし

まうのは、親や後見人が留守児童の行動を気にかけておらず、保護や監督もしないという背景がある (ibid.)。

2.6 親の出稼ぎが留守児童の心に与える影響

本章では、まず家庭と学校という農村留守児童が生活する重要な 2 つの場に注目して留守児童が抱える問題を整理した上で、農村留守児童が不慮の事故や性暴力の被害者となったり、犯罪の加害者になったりする「場」を超えて生じている問題について先行研究の分析を行った。本節では、それらの課題を横断的に捉え、留守児童の精神的側面を分析対象としている先行文献を、親の出稼ぎが留守児童に与える影響と、留守児童が親の出稼ぎに抱く感情の 2 つの視点から先行研究を分析する。

第 1 に、親の出稼ぎが留守児童に与える影響について以下の 3 点が挙げられる。1 つ目は、孤独感と不安感である。子どもにとって最も親しい存在である親が突然自分のそばから離れることは、何も心の準備ができていない幼い子どもに衝撃を与え、馴染んでいる環境から離されて、新しい環境での暮らしを強制される。留守児童はこのような大きな変化に対応できず不安を覚える。また、留守児童を世話する後見人は衣食住などの日常生活には気を配るが、留守児童の考えや気持ちなどには関心を示さない。留守児童自身も自ら自分の不安な気持ちを口に出せず、時間の経過とともに不安感は拡大する。学業や日常生活で、自分には解決できない問題に遭遇したり、思春期に入って生理的な変化の中にいたりする場合には、大きな精神的ストレスを感じる。こうした時には、親や信頼できる大人が話を聞き、適切な助言をできる環境が一番重要である。しかし、農村の学校にはカウンセラーのような存在はおらず、出稼ぎに行っている親も助けることはできない。誰からも精神的な助けを得られず、留守児童自身もどうすればよいかわからないため、孤独感が強くなると考えられる (范・方・刘・刘 2009)。

2 つ目は、劣等感から他人と付き合いたくない気持ちになることである。留守児童の精神的問題を研究した王・陈 (2009) は、「自分が親に嫌われたから、親が出稼ぎに行った」「自分は親に捨てられたのではないか」と考える留守児童の姿を聞き取り調査から描き出した。また、黄 (2013) は、長期間親の愛情を受けていないと感じることで、親の愛情をもらっているように見える他の子どもと比べ劣等感を抱くようになり、さらに、自分は差別されるのではないかと考えて、周囲の人とは付き合わないようにもなるケースを報告している。

3 つ目は、親が出稼ぎした後の焦燥感である (潘・叶 2009)。留守児童に何か問題が起きた時、出稼ぎ先の親はすぐに助けに行くことができないこともあって、留守児童を責める傾向にある。例えば、留守児童の成績が悪かった場合、親は理由も聞かずに電話で叱るケースが報告されている。留守児童自身は親や後見人のサポートがないことも成績が悪い原因だと考えていても、その責任は留守児童自身にあると出稼ぎしている親から責められる。そうした親の態度は留守児童には理解しがたく、そのことが留守児童の心をかき乱し焦燥感を増大させている (ibid.)。

第 2 に、留守児童が出稼ぎに行った親に対して抱く感情には次の 2 つがあると指摘されている。1 つ目は、親に会いたい、早く帰ってきてほしいという気持ちである。多くの留守児童がこのタイプではあるが、このような留守児童は後見人や農村の周りの人をあまり信頼しておらず、悩みや不満などを話す相手がいないことから、ストレスをため込んでしまう（黄 2013）。もう 1 つは、出稼ぎに行った親を恨む場合である。ごく少数ではあるが、出稼ぎに行かざるをえない親の能力や努力の欠如を批判し、親のせいで家族が困窮したと考えている留守児童もいる。親を嫌い、自分も自暴自棄になり、さらに暴力に訴える傾向が出てくる可能性もある（ibid.）。

2.7 非貧困地域への着目

中国の農村留守児童は、政策的な誘導もあって農民工が急拡大したことにより、21 世紀に入って急速に増加し、それに伴って様々な問題が指摘されている。農村留守児童を取り巻く状況について、「場」である家庭と学校、「問題」としての性暴力被害、不慮の事故、犯罪、それらを横断する「精神的な影響」の観点から先行研究をまとめた。その結果、場としての家庭では、後見人は留守児童に対するしつけは言うまでもなく、子どもの健康と衛生の側面の面倒を十分に見られない場合がある。学校では、就学条件の劣悪さ、家族が子どもの学業を重視しないことが、子どもの学業にマイナスの影響を与える。問題としての性暴力、不慮の事故、犯罪については、後見人や親は留守児童に対して世話・しつけが不足していることが主な原因となり、こうした問題を生じさせる。精神的な影響では、親の出稼ぎによって、子どもの不安、孤独、劣等感、焦燥感を引き起こす。子どもは親の出稼ぎに対して、会いたい気持ちを強く持つ一方で、少数ながら恨みに感じている児童もいる。

先行研究では農村留守児童の一般的な状況を明らかにしている。しかし、ケーススタディやインタビュー調査に基づく先行研究は、マスメディアの報道と同じように、貧困地域や経済的にかなり困難な家庭に偏っている傾向がある。本章で繰り返し引用している貴州省の貧困県に関するフィールドワーク結果はその典型である。第 1 章で述べたように、貧困発生率の高い省に留守児童が多くいるわけではない。本章で整理したような留守児童をめぐる先行研究の結果が、それほど貧困とは言えない地域にも当てはまることなのかどうか。あるいは、貧困地域かどうかと関係なく共通して発生している問題と、経済状況に密接に関係している問題があるのかどうか。その点を明らかにするため、次章では湖南省の非貧困県でのフィールドワーク調査の結果をもとに論じる。

第3章 湖南省非貧困県の農村留守児童についての調査

3.1 調査地と調査対象について

前章では、中国の農村留守児童を取り巻く全体状況を先行研究からまとめた。マスメディアの報道だけでなく先行研究においても中国の貧困地域や経済的に困難を抱える留守児童についての深刻な事件や状況に焦点を当てる傾向にある。第1章でデータを示したように、農村留守児童数の多い省は必ずしも貧困発生率が高いわけではない。絶対数から見ると、貧困発生率がそれほど高くない省に多くの留守児童が親と離れて困難な生活を営んでいる。

そこで筆者は、これまでマスメディアや研究者からあまり注目を浴びてこなかった、貧困地域以外の農村で暮らす留守児童の状況を明らかにすることを本研究の問いとした。この問いに取り組むため、2015年12月9日～2016年1月1日に非貧困県²⁷である湖南省澧県の澧澗村でフィールドワークを行った。本章では、調査結果に基づき、非貧困県での農村留守児童の状況や問題について、前章の先行研究レビューと同じように、家庭、学校、性暴力被害と不慮の事故、犯罪、それに精神的な影響という側面から論じる。

3.1.1 湖南省澧県澧澗村

湖南省は中国の中部、長江の中流に位置し（図3参照）、面積は21.18万km²であり、中国総面積の2.2%を占める。省には13市、1自治州、122県がある。2013年末時点で、湖南省の総人口は6690万人を超え、全国で7番目に多い²⁸。

²⁷本研究では、国務院が2012年に公布した「各省で援助を行う県のリスト」で定めた貧困県以外の県を「非貧困県」と呼ぶ。また、中国政府は2011年11月29日の「貧困地域の援助・開発に関する会議」で、貧困県を援助する基準を「農民1人当たりの年収が2300元（約4万円）以下」と定めた。つまり、本研究で扱う「非貧困県」では1人当たりの年収が2300元を超えていることになる。

「扶贫办发布“国家扶贫开发工作重点县名单”」（各省で援助を行う県のリスト） 国務院ホームページ

（http://www.gov.cn/gzdt/2012-03/19/content_2094524.htm 閲覧日2016年12月25日）

「中央扶贫开发工作会议胡锦涛、温家宝发表重要讲话」（貧困地域の援助・開発に関する会議） 国務院ホームページ

（http://news.xinhuanet.com/politics/2011-11/29/c_111203767.htm 閲覧日2016年12月25日）

²⁸ 湖南省人民政府のホームページ （<http://www.hunan.gov.cn/sq/> 閲覧日2016年12月26日）



図 3：中国地図²⁹

湖南省澧县澧澂村を調査地に選んだ理由は 3 つある。

第 1 に、澧澂村がある湖南省には多くの農村留守児童が暮らしている。中華全国婦女連合会によると、2010 年の湖南省の農村留守児童人数は、435 万 1100 人に達し、全国第 5 位の多さである（序章 表 1 参照）。

第 2 に、澧澂村がある澧县は中国政府が指定する貧困県ではない。2011 年 11 月 29 日に北京で開催された「中央扶贫开发工作会议胡锦涛、温家宝发表重要讲话」（貧困地域の援助・開発に関する会議）³⁰で、国は農民 1 人当たりの年収が 2300 元（約 4 万円、2010 年の貧困ライン）を新たな支援対象の基準と決めた。翌年 3 月 19 日に、国はこの基準に則って、「扶贫办发布“国家扶贫开发工作重点县名单”」（各省で援助を行う県のリスト）³¹を発表し

²⁹ 「中国行政地域の地図」（<http://map.ps123.net/china/307.html> 閲覧日 2016 年 12 月 26 日）

³⁰ 「中央扶贫开发工作会议胡锦涛、温家宝发表重要讲话」（貧困地域の援助・開発に関する会議） 國務院ホームページ

（http://news.xinhuanet.com/politics/2011-11/29/c_111203767.htm 閲覧日 2016 年 12 月 25 日）

³¹ 「扶贫办发布“国家扶贫开发工作重点县名单”」（「各省で援助を行う県のリスト」） 國務

た。湖南省内で国の支援の対象となったのは 20 県だが、澧澗村が位置する澧県は含まれていない。すなわち調査対象地は非貧困県といえる。なお、澧県は湖南省の北部の常德市に属している³²。

第 3 に、本格調査を行う前に、筆者は友人の紹介を通じて、澧澗村で 1 週間の予備調査を行っており、その結果、この村は非貧困県に位置しているのみならず、村の社会基盤状況や世帯の経済状況からみても、貧困地域に当たらないことをあらかじめ確認している。村の 80%以上の家庭が家を新しく鉄筋造りに建て直しており、村の道路も舗装し直し、大きなトラックでも通れるように改修されていた。公式な統計を入手することはできなかったが、村人たちとの雑談によれば、村人の家庭収入（出稼ぎ親と祖父母両方の収入）は少なくとも年間 5 万元（約 85 万円）～6 万元（約 100 万円）に達している。祖父母 2 人、出稼ぎの親 2 人、子ども 1 人～2 人という人数で計算すると、1 人当たりの年収が約 1 万元（約 17 万円）である。これは、1 人当たりの年収が 2300 元（約 4 万円）という国の貧困ラインの 4 倍以上である。つまり、家庭の収入や村のインフラ環境は、貧困県の農村部よりもかなり良いことがわかっており、非貧困地域の留守児童の実態を明らかにするという本研究の目的に合致していた。また、予備調査期間中に村人と信頼関係を築けていたため、本格調査で村人とのコミュニケーションが取りやすい点も調査地に選んだ理由の 1 つである。

3.1.2 調査対象と調査方法

調査の対象と方法は主に 3 つある。第 1 に、村の唯一の小学校で 13 日間（週末を除く）、参与観察を行った。毎朝、児童と同じ時間に登校して一緒に授業を受けたり、昼ご飯を食べたり、ゲーム遊びをしたりした。参与観察の目的は、留守児童の学校で日常的な態度、授業での積極性、友達や教員との付き合いなどを観察することである。第 2 に、この小学校の教員 5 人全員（校長を含む）に対するインタビュー調査である。その目的は、学校の基本状況、留守児童問題についての教員の考え、学校と家庭のつながりなどを明らかにするためである。第 3 に、5 世帯の留守児童家庭（後見人と留守児童の両方）へのインタビュー調査である。後見人には子どもとのコミュニケーションや子どもの教育についての考えなどを、また留守児童には日常生活での悩みや親・後見人とのコミュニケーションの実情とそれに対する考えを聞くことで、留守児童家庭の状況をより具体的にひもといた。

3.1.3 調査対象に関する基礎情報

調査対象としたのは澧澗村で 1 校しかない三泉小学校である³³。公立小学校で、鎮の「中

院ホームページ

(http://www.gov.cn/gzdt/2012-03/19/content_2094524.htm 閲覧日 2016 年 12 月 25 日)

³²日本とは異なり、中国では「県」が「市」の中に位置している。

³³調査した学校は 4 学年までの児童しかおらず、筆者がインタビューできる留守児童が 1 年生～4 年生に限られている点は本研究の 1 つの限界である。

心小学校」(完全小学校)³⁴と同じように鎮の中学校が管轄している。児童数は46人で、そのうち留守児童は80%以上を占めている(表2を参照)。教職員は6人で、校長1人、教員4人、「後方勤務」と呼ばれる食事の世話をする職員1人となっている。

この小学校は4つの学年しかなく、1学年1クラスの不完全小学校³⁵に属する。児童が4年生まで修了した後、鎮の中心小学校で5学年、6学年の学業を続け、中学校3年まで通い続けることで、中学校の卒業証明書をもらうことができる³⁶。また、ある程度経済的に余裕のある家は子どもを最初から鎮の小学校に就学させる。

表2：三泉小学校の留守児童と非留守児童の人数(単位：人)

	1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	総数
留守児童	13	7	9	10	39
非留守児童	3	2	2	0	7
全児童数	16	9	11	10	46

聞き取り調査をもとに筆者作成

先述した通り、この小学校には校長を含み5人の教員がいる。中国では、義務教育の段階から学校が「分科教育法」を採用している。「分科教育法」とは、日本の小学校のように担任の教員がほぼ全ての科目を教えるのではなく、1年生から授業の科目に合わせて教育方法を変えるやり方である。小学校低学年を教える教員でもそれぞれの科目の専門性が要求されるため、中国では小学校から1科目に1人の教員が対応するのが一般的である(丁2014)。しかし、調査対象の三泉小学校には、校長を除くと教員が4人しかいない上、それぞれの専門科目が国語³⁷と数学に限られているため、教員は児童に対して、国語と算数の授業しか教えない。三泉小学校の教員は村に近い鎮に住んでおり、平日は学校に住み込み、週末に帰宅する生活を行っている³⁸。

³⁴「完全小学校」は初級の学年(1~3年)と高級の学年(4~6年)を設置する小学校を指す。初等の義務教育である小学校卒業に必要な修学年数は省、自治区、市が規定する。5学年または6学年。(百度百科

http://baike.baidu.com/link?url=0StJfUj2RESIwZ6fnYZTSYvluizh2FSrxznf-Eaw_lPdH_hjDvZv9sPDxm_mlGMZ3DTBSXTHPrRTAalFsuqaFCIAQEImjmbb8fA8UMJ6e3xLJJbq6NOE8C2F6QSBQrsdU 閲覧日2016年12月25日)

³⁵設置されているのが、卒業に必要な6学年もしくは5学年に満たない小学校。

³⁶校長のインタビューによると、村の小学校は鎮の小学校と同じように鎮の中学校が管轄するため、村の小学校で4学年まで修了した児童は、引き続き鎮の小学校に入り学業を続ける。9年間義務教育であるため、鎮の小学校と中学校が合併され、鎮の小学校で6学年まで修了した児童は、そのまま鎮の中学校に入る。小学校6年と中学校3年の9年間の義務教育を修了した後、鎮の中学校から卒業証明書が発行される。

³⁷中国の国語科目は「語文」と呼ばれ、五十音図のような基礎の発音から、単語の意味を理解し、文章を読む能力と作文を書く能力を習得するなどの内容がある。

³⁸村の三泉小学校から鎮まで歩いて片道40分~1時間ぐらいかかる。

表 3：三泉小学校の教員に関する情報

1年生の担任	50歳、女性、1年の国語と算数を担当する。高校卒業、教員資格を持っていないが、10年以上の教員歴がある。知り合いの紹介を通じて、この学校で代課教師として1年間勤めている。
2年生の担任	54歳、男性、2年の国語と算数を担当する。高校卒業、教員資格を持っており、32年の教員歴がある。県の教育局の人事異動により、この学校で勤めている。
3年生の担任	59歳、男性、3年の国語を担当する。最終学歴は高等専科学校卒業 ³⁹ 。教員資格を持っており、39年の教員歴がある。県の教育局の派遣により、この学校で10年間勤めている。
4年生の担任	55歳、女性、3年と4年の算数を担当する。最終学歴は高等専科学校卒業。教員資格を持っており、30年以上の教員歴がある。前の学期に鎮の小学校を定年退職後、校長としてこの学校に招聘され勤め始めた。
校長	54歳、男性、4年の国語を担当する。最終学歴は大学卒業で、教員資格を持っている。この学校に来る前に、県の中学校に務めたことがある。県の教育局の派遣により、この学校で14年勤めている。

聞き取り調査をもとに筆者作成

最後に、調査対象の5世帯の留守児童家庭について説明する。小学校で参与観察を行っている間、筆者は教員の許可を得たうえで、1年生3人、2年生4人、3年生1人⁴⁰、4年生3人の計11人の留守児童に対して留守児童の名前、年齢、後見人は誰か、出稼ぎ先の親との連絡頻度など簡単な基本状況を質問した。次に、この11人の留守児童のうち、後見人と留守児童の両方からインタビューの許可を得られた5世帯を選んだ(表4)。

表 4：インタビュー対象の留守児童に関する情報

	後見人	出稼ぎの親との関係	家庭の収入
Rさん (1年生)	祖父母と 叔父	小学校入学前に広州で出稼ぎの両親と暮らしていた。	両親の出稼ぎ、祖父母の収入(野菜農家に雇われている)

³⁹高等専科学校は主に高校を卒業した後に専門的な教育を受ける場で、大学とは異なり学位がもらえるわけではなく、3年から5年の修業年数を経て卒業証明書がもらえる。

⁴⁰毎授業後の約10分の休憩時間を利用し、質問を行った。筆者が学校で参与観察をしている期間は、期末試験前であり、試験に備えて休憩の時間を利用して勉強する場合もあった。特に3年生の児童は、教員に要求された宿題が多いため、休憩の時間でも全員の児童が教室で宿題をする光景がよく見られた。こうした児童の都合を考慮したため、筆者がインタビューの許可をもらえた留守児童は11人である。

		両親とは1年間離れている。	
Yさん (2年生)	祖父母	生後2ヶ月の頃、両親が出稼ぎに行った。	両親の出稼ぎ、祖父母の短期間の出稼ぎ(近くの鎮)
SYXさん (4年生)	祖父母	生後8ヶ月の頃、両親が出稼ぎに行った。	両親の出稼ぎ、祖父の収入(村人の手伝いと野良仕事)
SYRさん (4年生)	母親	生まれる前に、父親が出稼ぎに行った。	父親の出稼ぎ
Gさん (4年生)	祖父と曾祖父	生まれる前に、両親が出稼ぎに行った。生まれた後、農村に連れ帰られ、祖父と曾祖父と暮らしている。	両親の出稼ぎ、祖父の収入(野良仕事)

聞き取り調査に基づき筆者作成

インタビューをした留守児童5人の出稼ぎの親は年に1度(春節)しか帰らない。週に1度ほど留守児童と電話で連絡しており、会話の時間は毎回5分~10分程度だという。また、5人のうちRさんは、生まれてから親と出稼ぎ先で暮らしていたが、地元で就学しなければならず、入学する前に親が村に連れ戻したため祖父母と暮らさざるを得なかった。インタビューした時には1年間親と会っていなかった。Yさんは、毎年夏休みに親の出稼ぎ先に連れられ、親と一緒に1ヶ月ほど暮らせる。秋学期が始まる前に農村の祖父母の家に戻るため、残りの3人は1年間で親と会える時は春節しかない。

3.2 澧淞村でのインタビュー内容の設定

インタビュー対象は小学校の教員、留守児童の後見人、及び留守児童本人である。半構造化インタビューを実施し、主に以下のような狙いで質問項目を設定した。

まず教員に対しては、学歴、教員歴など教員本人に関する基本情報と留守児童の学業状況やクラスの中での行動について話を聞いた。教員に関する基本情報を尋ねたのは、先行研究では農村学校で学歴が低く、非正規の代課教師を採用したという指摘がなされているため、教員自身の背景情報が必要であると考えたからである。また、先行研究では、留守児童は学校をさぼる、無断欠席するなどの問題があると指摘されているため、学校で最も身近に長時間留守児童と接している教員に児童の学業や学校生活の様子を聞くことで同様の問題があるかどうか、どのように振る舞い、行動しているかがわかると考えた。また、学校と後見人の繋がりを知るために、後見人との連絡の頻度・内容・方法や父母会の状況について質問した(具体的な質問内容は別紙1を参照)。

後見人へのインタビューは4つの観点から行った。第1に家庭の収入及び収入源についてである。非貧困県の留守児童の状況を明らかにするためには留守児童家庭の経済状況を把握する必要があると考えたからである。第2に、先行研究では後見人は子どもへの教育

には無関心で、時には暴力でしつけをすると述べられており、後見人が抱く子どもの教育についての考え方を理解することが重要であると考えた。第 3 に、先行研究では留守児童の退学問題が指摘されているため、子どもが将来学業を続けることについて後見人がどう考えているか話を聞いた。第 4 に、子どもと出稼ぎ先の親のコミュニケーションの実態を知るために、親との連絡頻度、内容など具体的な状況を尋ねた（具体的な質問内容は別紙 2 を参照）。

留守児童に対しては、第 1 に、留守児童の後見人に対する考えを理解するため、普段の後見人と留守児童のコミュニケーションの内容、関心を持っている内容、留守児童が抱く後見人の教育に対する不満や期待などを質問した。第 2 に、留守児童の精神的な苦痛を明らかにするため、留守児童が親の出稼ぎに対して、どのような考えを持っているのかを尋ねた。具体的には、出稼ぎしている親とのコミュニケーションの頻度、内容、親の出稼ぎに対する考えなどの話を聞いた。第 3 に、留守児童に親や後見人による影響とは関係がない精神問題があるか明らかにするため、留守児童自身が日常生活で抱えている悩みやその解決方法を聞いた（具体的な質問内容は別紙 3 を参照）。

3.3 豊洲村の留守児童についての調査結果

本節では、調査結果を前章の先行研究と同じように、学校、家庭、性暴力被害と不慮の事故、犯罪、それに留守児童が抱える精神的な苦痛という 5 つの側面からまとめる。

3.3.1 三泉小学校における留守児童の就学状況

参与観察とインタビューの結果、留守児童が通う学校では、施設・設備、予算と教員の不足、給食、遅刻や欠席などの留守児童の学校での行動という 4 点の課題があると考えられる。

図 4 は筆者が参与観察した三泉小学校で 2 年前まで使っていた旧校舎である。旧校舎は 1 階建てで老朽化したため、後ろの土地に新しく鉄筋造りの 2 階建て校舎が建設された（図 5）。新校舎は、4 つの教室に加えて、各教室に教員の部屋も付いている。児童が使う食堂とトイレは、校舎とは別に建てられた。わずか 2 年前まで旧校舎で授業を行っていたことを考えると、小学校の学習環境は決してよくなかったことがわかる。



図 4：旧校舎

筆者撮影



図 5：新校舎

筆者撮影

校長の話によると、校舎が建て直された理由は、県が農村の小学校のインフラ施設を重視するようになったからである。

「元々の校舎は村委員会によって建てられたから、壁、窓、ドア等はもう老朽化してしまい、使えなくなってしまった。最近の2年間、教育行政部門は30万元（約500万円）ぐらいを支給してくれ、校舎、道路、トイレ、学校周りの塀など

全体のインフラ施設を建て替えた」⁴¹

三泉小学校のインフラ施設は以前よりかなり改善されたが、教育の質という点では十分ではないという。

「経費と教員不足のため、教育局が定めている授業の一部分は正常に実施できない。例えば、うちの学校の英語の先生は校外から招聘され、学校の正式的な教員ではなく、毎日授業を実施できず1週間に1回しか4年生を教えられない。体育の授業では、先生がいないため、児童には自由に活動させるしかない。それで、現在は、国語と算数の授業しか実施していない。また、パソコンのような授業も実施されにくい。村に通じる道路の一部は状況が悪いため、パソコンなどハードウェア設備を学校に運べない。学校に運べたとしても、パソコンなどを管理する人を雇用する予算がないため、盗難の危険が高いなど、機材の保管が難しい」⁴²

先行研究で指摘された留守児童に係る学校での課題の1つに食事の提供がある。留守児童が食事の支度のために時間を割かれることが自宅での学習時間を減らすだけでなく、栄養の問題が指摘されていた。調査対象の三泉小学校では、毎日、全児童に対して3度の食事（朝食、昼食、夕食）を提供していた。食事の費用は、県の標準では、義務教育段階は1日14元（約240円）（朝食4元、昼食5元、夕食5元）である⁴³。筆者の観察では、毎日の食事内容は大きくは変わらず、白米飯と野菜（大根、白菜、サツマイモ、かぼちゃなど）が主だった。児童の食事時間と授業時間の関係は表5の通りである。

表5：学校の時間割

8:00~	朝食、自習
9:00~11:20	午前の授業、1コマ40分、途中で10分間の休憩
11:20~	昼食、自由活動
14:00~16:20	午後の授業、1コマ40分、途中で10分間の休憩
16:20~	夕食、授業終了

聞き取り調査に基づき筆者作成

小学校で児童に食事を提供する主な目的は留守児童のためである。4年生の担任は次のように述べている。

⁴¹校長へのインタビュー、2015年12月23日、教員休憩室にて

⁴²同上

⁴³食費は県が決めた。費用は児童側の負担である。

「児童に学校で朝食、昼食、夕食を食べさせる目的は、留守児童は毎日学校にいる時間が長くなって、当日の授業で理解できないことがあれば、すぐ教員に質問できるようにするためです。授業時間以外でも教員がいつでも児童の問題に対応できます。できる限り学校にいる間に宿題を終わらせるんです。祖父母は、こうしたことに全く対応できません。ですから、うちのような地域の学校では、どこもだいたいこうした対策を行っています」

中国では、子どもが宿題をする時、親がそばで子どもの勉強をみてあげ、宿題に間違いがあるかどうかや宿題を終わらせたかどうかをチェックするというのが一般的な状況である（呉 2013）。しかし、先行研究で指摘されていたように、後見人である祖父母や親戚は留守児童の学習にあまり関心を示しておらず、わからなかった問題や宿題の手伝いをすることはほとんどない。留守児童も自分だけで宿題を終わらせることができない。教員がこうした留守児童のいわば補習を学校で行えるような環境づくりが3度の食事の提供なのである。児童が夕食を食べた後、教員が児童を学校に残らせ、学業を指導する場合がよく見られる。一方で、この小学校の児童は全員この村に住み、通学時間は30分～40分以内であるため、児童が泊まれる寄宿舎はない。先行研究（肖 2012）では、貧困地域の農村の小学校には寄宿舎がないため食事を提供できないことが留守児童の抱える問題の1つとして指摘されていたが、筆者が調査した小学校では、寄宿舎の有無と食事の提供は関係していなかった。なお、先行研究では学校が食事を提供する目的として、児童の栄養バランスを取ることが挙げられていたが、筆者が調査したこの小学校では、そうした理由を挙げた教員はいなかった。

インタビュー調査で指摘された留守児童をめぐる学校での課題の1つに、留守児童の振る舞いがある。以下は、1年生、2年生、4年生の担任教員のインタビューである。

「留守児童の中には、先生を尊敬せず、他の児童の宿題を剽窃し、自分で頭を働かせることが嫌いな児童がいます」⁴⁴

「留守児童は家に帰った後、自分の宿題を終わらせられないことがよくあります。祖父母は文字さえ読めないから、児童は何の宿題があるか、どうやってやるかがわかりません。祖父母は、時々子どもに『宿題は終わった？』と聞くだけで、本当にはチェックしません。ですから、子どもたちは宿題をやりたくない、やらないで済みます。留守児童は学校での振る舞いも良くないです。授業では注意力が散漫で、鉛筆や消しゴム等で遊びながら授業を受けるという傾向があります」⁴⁵

⁴⁴1年生の担任へのインタビュー、2015年12月15日、教員の部屋にて

⁴⁵2年生の担任へのインタビュー、2015年12月16日、教員休憩室にて

「ある留守児童は何をしても、自信がなく、びくびくしています。留守児童は祖父母と暮らしていて、自分が何か間違いを犯すと、すぐ祖父母に叱られるようです。だから、子どもたちは何かをやる前に、びくびくしています」⁴⁶

1年生と2年生の担任は、欠席、遅刻、宿題をやってこないなどの問題があったら、すぐに児童の後見人に電話で連絡し、その理由を聞くなどの対応をしていると話していた。また、4年生の担任は、留守児童に何か問題が生じた時、電話で児童の状況を後見人に伝えるだけでなく、児童本人ともその理由について話し合うなど積極的にコミュニケーションを取っているということだった。その結果として、小学校の教員の側が、具体的に確認できる留守児童の問題については対応できる状態になっていた。

以上のように、筆者が参与観察とインタビュー調査を行った三泉小学校では、教育の質を一般の公立学校並みにするには教員や財政が不足しているものの、学校のインフラ施設は以前より大きく改善され、寄宿舎はないが、児童に食事を提供していた。また、欠席、遅刻、宿題をやってこないなど、目に見えて表れる留守児童の問題に対しては、教員や学校としてきめ細かな対応を行っていることがわかった。

3.3.2 後見人との暮らしについて

本項では、調査地の三泉小学校に通う留守児童が家庭でどのように暮らしているのか、どのような困難を抱えているのかについて、後見人が留守児童の世話をよく見られず、留守児童の学業を助けられないという先行研究で指摘のあった点に留意しながら、前述した5つの留守児童家族への参与観察をもとに明らかにする。先行研究であまり指摘されていないものの、筆者のインタビュー調査の過程で重要だと考えるようになったのは後見人と小学校のつながりである。本項では「後見人と留守児童の関係」と「後見人と小学校のつながり」の2つの観点からインタビューを整理していく。

まず、前者について、RさんとGさんの後見人は子どもの衛生面に最も注意していた。

「おばあさんは主に子どもの生活を重視します。おばあさんは毎朝4時ぐらいに起きて、子どもにご飯を作ってあげるだけでなく、子どもの汚れた服を洗い、部屋の掃除もやります」⁴⁷

「子どもの生活面の世話は十分にやっていますよ。子どもの汚い服を洗濯機できれいに洗えないので、私は毎回手で洗っています」⁴⁸

⁴⁶4年生の担任へのインタビュー、2015年12月17日、教室の外の廊下にて

⁴⁷Rさんの祖父へのインタビュー、2015年12月30日、自宅にて

⁴⁸Gさんの祖父へのインタビュー、2015年12月20日、自宅にて

調査対象の村では留守児童の祖父母は 50 代 60 代がほとんどであり、健康上の問題もなく、子どもの日常生活の面倒を見るだけの体力を十分持っている。少なくとも、祖父母が子どもの健康と衛生という日常生活の側面の面倒を見る体力があるため、子どもの健康・衛生問題は先行文献で言われたような深刻の状況にはなかった。

留守児童が家庭で必要なサポートは日常生活だけではない。前述したように、中国では学校の勉強についても家庭の役割が大きいと言われている（呉 2013）。その 1 つが宿題である。G さんの後見人は忙しいため宿題を見てあげる時間がない。また、他の 4 人の後見人は、勉強内容が難しく、子どもの答えをチェックしても、どこが正しいか、どこが間違いか、まったくわからないという。

「時々子どもに『宿題をやったか』と聞くと、『終わった』と返事をします。しかし、子どもが私を騙しているのではないかと心配なので、子どもを迎えに学校に行った時に、先生とよく話し合っています。しかし、今年から忙しくなったため、あまり学校へ行けなくなりました。だから、最近は、ただ『宿題をやったか』って聞いて、それ以上はあまりチェックしなくなりました。この前、学校が 1 週間休みの間、子どもは宿題を何もやりませんでした。でも、私には『宿題を全部終わらせた』って言ったんです。先生から子どもが宿題をやってこなかったことを知らされて、私は騙されたことに気がつきました」⁴⁹

「子どもの宿題について、私はただ『宿題をやったか?』と聞いているが、具体的にどの程度やったのかはよくわかりません。子どもが宿題をまじめにやったかどうかに対して、私は先生の子どもの宿題に対する評価からしか判断できません」

50

また、SYR さんの後見人は子どもの成績が悪くなり、宿題をまじめにやらないため、子どもにいつも根気がなく、気性が激しいと述べていた。

「子どもの試験が不合格⁵¹になると、子どもはテストの答案用紙を私に見せません。私に叱られるからです。子どもの成績が良くないから、『私は毎日早く起きて、オートバイであなたを学校まで送っているのに。でも、あなたの成績を見るとそういう生活続ける自信がなくなった』って言ってました」⁵²

中国では、親は子どもに宿題でわからないことを説明するだけではなく、宿題が全部終

⁴⁹G さんの祖父 へのインタビュー、2015 年 12 月 20 日、自宅にて

⁵⁰Y さんの祖母 へのインタビュー、2015 年 12 月 28 日、自宅にて

⁵¹中国では、100 点が満点であれば、60 点未満は不合格となるのが一般的である。

⁵²SYR さんの母親へのインタビュー、2015 年 12 月 22 日、自宅にて。

わったかどうかをチェックする(呉 2013)。農村留守児童の教育現状を研究した謝ら(2010)は貴州省の農村で出稼ぎの親 114 人に学歴についてのアンケート調査を行った。調査結果によると、64.9%の親は中学校卒業、10.5%は高校卒業、22%は小学校卒業及びそれ以下である。つまり、貴州省の調査では、留守児童の親の学歴は中学校卒業に集中することがわかった(謝・申・陈 2010)。一見すると親の学歴は低いと考えられるが、董(2010)は中学校を卒業しているくらいであれば、小学校の子どもの宿題を十分に手伝えられると指摘する。しかし、調査した村では留守児童の後見人のほとんどが祖父母であり、小学校卒業程度、あるいはそれ以下の学歴しかいないため、祖父母が留守児童の学業面でのサポートをすることはできないと考えられる。したがって、祖父母と暮らしている留守児童は学業面で困難を抱えている。

次に「後見人と小学校のつながり」である。SYX さんの後見人と G さんの後見人は子どもの送り迎えの時に、たまに教員から子どもの学校での様子を聞くことがある程度である。

「私はたまに学校へ行き、先生に子どもの成績を聞きます。先生に厳しく教育してほしいです。私は父母会に 1 回参加しただけで、それ以外は、ほとんど子どものおじいさんが参加しました。おじいさんはあまり話さずに、父母会のあとすぐ帰ってしまうので、先生と深い話をしません」⁵³

「以前は、子どもの状況について先生とよく話し合っていました。今年から忙しくなったので、先生と話すことは少なくなりました。でも、私は先生に『子どもが先生の話の聞かない時は、叱っても、叩いても大丈夫です』って言っています」

54

本項では、留守児童の家での生活上の困難を明らかにするため、後見人と児童の関係、後見人と小学校の関係に着目して、参与観察とインタビュー調査を行った。その結果、先行研究で大きな問題として指摘されていた食事の支度や栄養面に関わる問題は、調査対象の小学校が 3 食提供していることから 5 人の留守児童世帯では全く見られなかった。病気につながりやすい衛生問題についても、後見人が非常に気にしている様子がインタビューに表れていた。その反面、留守児童の家での学習支援については、忙しさや後見人の学力不足から、適切に対応できていなかった。また、留守児童が叱られるのを恐れて本当のことを言わないなどの理由で、子どもの学習状況を把握することが困難なケースもあった。そうした問題を解決するため担任や教員とコミュニケーションを取る必要性を感じている後見人もいたが、祖父母間での認識の違いや後見人自身の仕事の忙しさなどのために、十分な連携を取れていない様子がうかがえた。

⁵³SYX さんの祖母へのインタビュー、2015 年 12 月 24 日、自宅にて

⁵⁴G さんの祖父 へのインタビュー、2015 年 12 月 20 日、自宅にて

3.3.3 未然に防止される被害

マスメディアによる報道や先行研究の中では、留守児童をめぐるより大きな社会問題として、留守児童が性暴力の被害や不慮の事故に遭いやすいことが指摘されていた。本項では、その点について調査対象の村の状況を明らかにする。

校長の話によると、児童が登下校時に交通事故に遭わないように、この村ではスクールバスによって対策を講じている。県がこの小学校のためにスクールバスを提供したとのことである。また、1年生の担任によると、子どもの状況について出稼ぎ先の親や後見人とすぐに連絡できる体制を整えているだけでなく、毎学期の父母会で、子どもの通学途中の安全問題を重点的に取り上げ、子どもたちに対しても繰り返し注意しているとのことである。

「父母会で、特に子どもの安全問題を強調しています。スクールバスがあるものの、バスは夜明け前に出発します。朝の出発時刻が早すぎるので、後見人の中には子どもにもう少し寝させるために、後見人自身がオートバイで学校まで送ってくる人もいます。また、学校で課外活動をする時、子どもが高いところから飛び降りるような危ない行為を禁止しています。隣の林に入ることも禁止しています。木の枝に目が突き刺さる心配がありますから。このようなことを、常に子どもに注意させています。(中略) また、出稼ぎ先の子ども親と後見人の電話番号を持っていて、もし子どもが学校で病気にかかったり、何か危険な事故が起きたりしたら、すぐに後見人や親と連絡を取れるようにしています」⁵⁵

3年生の担任は、後見人の迎えが下校時刻に間に合わなかった際のエピソードを話してくれた。

「今朝、ある子どものおじいさんが学校に来て、私に、今日授業のあと用事があるので迎えに来るのが少し遅くなるかもしれない。子どもを学校で待たせて下さいと言っていました。この子の家は学校から遠くはないですが、おじいさんは子どもを1人では帰らせませんでした」

筆者が参与観察している期間、何らかの理由でスクールバスに乗らなかった児童は、ほとんどが後見人に送り迎えされていた。インタビュー対象者のうち、RさんとYさんの後見人は子どもの安全に対する懸念を次のように語っている。

「出稼ぎに行った親から子どもの面倒を頼まれた時、正直言って断りたかったです。私もおばあさんも毎日仕事があって、ずっと子どものそばにいてあげられな

⁵⁵1年生の担任へのインタビュー、2015年12月15日、教員の部屋にて

いですから。車が多くて、子どもが交通事故に遭うことを本当に心配しています。だから、週末に仕事する時には、子どもを連れて仕事に行っています」⁵⁶

「通学の際の安全を本当に心配しているので、自分が家にいる時は必ず子どもを学校まで送り迎えします。(中略) 出稼ぎに行っている親も電話で何度も子どもに『車に気をつけて、1人で道路を横切ってはいけない』と注意をしています」⁵⁷

調査対象の村では、後見人と教員は子どもの安全問題に対する意識が高い。そうなった経緯について、校長は4年生のある留守男児が学校で遊んでいて目に怪我を負い、それ以来休学している「事件」を挙げた。

「4年生のある留守男児が、学校で遊んでいる時に目に怪我をしたんです。治療費として、三泉小学校を管轄する鎮の中学校は10万円(約170万円)を、うちの小学校は1万円(約17万円)を負担しました。後見人は、子どもの安全意識が薄いくせに、学校で子どもに何か起きたら全部学校の責任だという考えを持っています。学校としては、子どもが怪我した際の治療費を負担するのは難しいので、事故が起きないように子どもの安全問題を重視しています」⁵⁸

調査対象の村では、留守児童が性暴力の被害や事故・火事など深刻な不慮の事故に遭った話はこの4年生の留守男児の怪我以外ほとんど耳にすることはなかった。留守児童は自分で食事を作る必要がないため、火の扱いを誤って火事を起こす恐れはないようだった。通学途中と学校での事故の防止は、県、学校、家庭の3者が強い関心を持って対策を取っていることがわかった。また、4年男児の目の怪我に対して管理責任を問われて治療費を負担した苦い教訓から、児童の安全の問題に一層気をつけるようになった。

3.3.4 見られない留守児童による犯罪

留守児童が犯罪の加害者になりやすい問題について参与観察とインタビュー結果から検討する。筆者が村の学校での観察をした13日間、児童が授業をさぼったり、理由もなく欠席・早退・遅刻したりするなどの問題は全く見られなかった。教員全員も、留守児童が宿題をやっこないとか、授業で注意力が散漫になるとかいった問題は起きているが、あまり深刻ではないと話していた。

また、インタビューした5人の後見人は、子どもが何か間違いを犯したら厳しく叱り、叩いたこともあると話していた。SYRさんやSYXさんの後見人は、そうやって厳しく教育

⁵⁶Rさんの祖父へのインタビュー、2015年12月30日、自宅にて

⁵⁷Yさんの祖母へのインタビュー、2015年12月28日、自宅にて

⁵⁸校長へのインタビュー、2015年12月23日、教員休憩室にて

する理由は、子どもに自分がやったことが間違いであることを意識させ、何が間違いかを覚えさせるためだと語った。Yさんの後見人も、子どもを甘やかさず、間違いを犯したら叱ったり叩いたりすべきだと考えている。

前述したように先行研究では留守児童が起こす犯罪の原因について、家庭の側面から見ると、出稼ぎ先の親と一緒にいられない申し訳なさをお金で償っているため、子どもにたくさんのお金をあげると指摘されていた。調査対象の村では、留守児童は親ではなく祖父母から小遣いをもらっている。また、5人のうち小遣いをもらったことがあるのはRさんしかいなかった。Rさんの祖父は「子どもの成績が上がった場合、子どもに1~2元（約17~34円）の小遣いをあげた」と述べていた。

学校の側面から見ると、先行研究によると、学校の教員は進学率を重視するため、成績が悪い児童を無視することがある。インタビューの結果、調査した学校では、教員全員が、成績の悪い児童に対して個別指導をし、児童が理解できない問題に対しては繰り返して説明するという教育を行っていることがわかった。また、1年生の担任と3年生の担任は、成績が悪い児童に対して個別指導を行い、成績が良い児童に成績が悪い児童の勉強のサポートをするよう促しているという。

最後に社会の側面から見ると、先行研究では、鎮・郷にある農村の学校の周りは遊戯施設が多いと指摘されていた。筆者が調査した場所は村であるため、鎮・郷と違って遊戯施設が全くなく、児童が誘惑される可能性もない。

したがって、調査対象の村では、留守児童が学校で起こす行動で深刻な問題は見られず、家庭では祖父母が子どもに対して厳しくしつけを行っており、留守児童による犯罪の問題は全く見られなかった。また、先行研究で指摘されていた留守児童の犯罪の原因と比較し、家庭では祖父母が留守児童の小遣いを厳しく管理し、学校では教員が成績の悪い児童にきめの細かい教育を重視し、村の社会環境を見ると、留守児童が遊ぶ遊戯施設がなく娯楽費のため窃盗や強盗を犯そうとする考えは浮かばないという点から考えれば、調査対象の村での小学校は、留守児童が犯罪を引き起こす要因がほとんど見られなかった。

3.3.5 貧困地域と変わらぬ心の苦悩

前項までは留守児童の「場」としての学校と家庭や、しばしばマスメディアなどで取り上げられる性暴力被害、不慮の事故、犯罪など留守児童に物理的に生じる問題や困難に目を向けてきた。本項では、実際に起きている問題だけからは見えにくい、留守児童の心に生じている困難について考える。

インタビューした5人の留守児童は全員親の出稼ぎ自体にはやむをえないことだと理解を示していた。その一方で、親に会いたい気持ちが強く、親と一緒に暮らしたいという思いを強く持っていた。RさんとSYXさんは、あまりに親に会いたくてこっそり泣いた経験を語ってくれた。

「毎日親に会いたくて、親が早く帰ってくることを望んでいます。時々こっそり泣きながら、親の写真を見ています。でも、お母さんの写真しか持っていないので、お父さんの写真もほしい」⁵⁹

「親には出稼ぎをしてほしくないが、しなくてはいけないことは理解できます。でも、親から出稼ぎに行く日を知らされ泣いたこともあります。行く日を知らされないと心地よくないです。でも、そういう自分の気持ちは誰にも教えたくない。仮に自分の気持ちを話したとしても、親が帰ってこられるわけではないし、無駄なことだと思って、自分の気持ちが一層悪くなってしまうからです」⁶⁰

また、Yさんは「毎回親と電話するより、親と一緒に暮らしたい」と話す。Gさんは自分の気持ちや考えを母親に伝えたいが、電話では十分に伝えられないとどこかしさを時々感じているという。

「私の気持ちや考えなどをお母さんと話したいです。でも、毎回お母さんと電話する時間が短くて、電話料金も高いから、自分の気持ちを十分に伝えられません。また、お母さんは年に1度しか帰ってこないし、家にいるのはたった1ヶ月くらいなので、私とちゃんと話し合う時間も少ないんです」⁶¹

両親と長く会えないことや深い話ができないことが留守児童にとっては大きな問題に感じられている一方、後見人とのコミュニケーションも留守児童の精神状態にとって重要である。Rさん、SYXさん、Gさんは、自分の話をいつも後見人に無視され、理解されていないと感じており、そのため自分の気持ちを話さなくなったという。

「おばあさんはたまに学校での食事などについて聞いてきます。おじいさんとおじいさんからは学校のことを全く聞かれたことがありません。自分も伝えたくないです。彼らは私の気持ちを理解できないと思うから。(中略)正直に言えば、私は祖父母に学校のことを聞いてほしいと思っています。でも、祖父母はあまり聞いてくれないので、自分から話し出すこともできません」⁶²

「自分の気持ちを数回祖父母に伝えましたが、祖父母は返事をしてくれませんでした。私もだんだん祖父母に話し出さたくないと思うようになりました。本当は、

⁵⁹Rさんへのインタビュー、2015年12月25日、自宅にて

⁶⁰SYXさんへのインタビュー、2015年12月23日、教室にて

⁶¹Gさんへのインタビュー、2015年12月21日、教室にて

⁶²Rさんへのインタビュー、2015年12月25日、自宅にて

祖父母が私の気持ちや考えを理解してくれて、私ともっと話し合うことを望んでいます。でも、祖父母は私とどうやってコミュニケーションしたらいいかわからないので、私が自分の考えを話しても、祖父母はどうやって返事をしたらいいかわからないんじゃないかと思います」⁶³

「おじいさんは忙しいため、私の考えや気持ちについて話し合ったことがありません。以前は、私も自分の考えなどをおじいさんに話したことがありますけど、おじいさんはひと言も聞いていませんでした。だから、自分の気持ちや考えなどをおじいさんに伝えても、無駄なことだと思うようになりました」⁶⁴

一方、親の出稼ぎが留守児童の精神面に与える影響について小学校の教員は次のように話している。

「この学校の留守児童はほとんど祖父母と暮らしています。大部分の祖父母は若いから、子どもの世話を十分にできると思います。なので、留守児童には深刻な問題は見られませんし、何か精神的なストレスがあるようにも感じられません。

(中略) 留守児童を見ていると宿題をやってこない、注意力が散漫であるなどの問題はありますが、孤独や憂鬱など深刻な精神的な問題は感じられません」⁶⁵

また、Rさんの祖父に「子どもに学校でのことを聞きますか？」と尋ねたところ、「聞いたことがない。子どもは毎日楽しそうにしているから、何も大きな問題はないと思いますし、心配していません」と答えた。

留守児童の抱える精神的な問題は、留守児童本人と周りの人たちでは見方が異なることがわかる。3学年の担任とRさんの後見人といった、留守児童本人ではない、しかし身近な人から見ると、調査対象の5人の留守児童は深刻な精神的なストレスや不安、悲しさを抱えていないように見える。一方で、インタビューを行った5人の留守児童はいずれも親の愛情を熱望し、親ともっと話したいと思っている。同時に後見人に対しても、もっと多くのコミュニケーションや自分への理解を求めている。外見的には心の不安や葛藤を家でも学校でも見せていないが、留守児童は深刻な心の悩みを抱えている可能性はある。それを誰にも話せないことが、留守児童にある種の「開き直り」の感情を生み、ますます自分の中に閉じこもっていく様子がインタビューからはうかがえた。

3.3.6 貧困状況と無関係な心の問題

⁶³SYXさんへのインタビュー、2015年12月23日、教室にて

⁶⁴Gさんへのインタビュー、2015年12月21日、教室にて

⁶⁵3年生の担任へのインタビュー、2015年12月18日、教員休憩室にて

本章で述べた湖南省の非貧困県の村での調査結果を、先行文献で指摘された中国の農村留守児童問題の全体状況を比較し表 6 にまとめた。

表 6 調査結果と先行研究の比較

	先行研究の指摘	調査対象村の状況
学校での課題	<ul style="list-style-type: none"> ・校舎の施設と衛生状況が劣悪、教員不足、寄宿舎不足、給食問題 ・児童の態度の悪さ、家庭と学校の繋がりが薄い ・中退問題 	<ul style="list-style-type: none"> ・校舎新築、教員不足、予算不足、寄宿舎なし、朝・昼・夕の 3 食提供 ・児童の態度の悪さ、家庭と学校の繋がりが強い
家庭での課題	<ul style="list-style-type: none"> ・片親が後見人：暴力や叱責による教育 ・祖父母が後見人：健康と衛生を軽視、勉強の面倒を見られない ・親戚や親の友人が後見人：しつめの困難 ・後見人が兄姉：兄姉の負担大、ストレス大 	<ul style="list-style-type: none"> ・後見人は祖父母。衛生面は十分に世話できるが、学力不足や忙しさを学業面を適切に対応できない ・子どもの送迎時に教員に子どものことを尋ねる
性暴力・事故	<ul style="list-style-type: none"> ・火事、性暴力被害、交通事故 ・原因としては後見人も留守児童も学校も安全対策に無関心 	<ul style="list-style-type: none"> ・県がスクールバスを提供 ・学校は父母会で安全問題を強調し、平日には児童に注意を促す。安全意識が高い ・後見人が児童を学校まで送迎するなど児童の安全に強い関心
犯罪	<ul style="list-style-type: none"> ・窃盗、強盗が多い、集団で犯罪、再犯率が高い ・原因として、親から小遣いが多く、後見人が子どもの態度の悪さを注意せず、教員は成績が悪い児童を無視、学校の周囲に遊戯施設が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・後見人は子どもに厳しくしつけ ・子どもは小遣いがない ・教員が成績の悪い児童を重視 ・村には遊戯施設がない
精神的な影響	<ul style="list-style-type: none"> ・留守児童の情緒：孤独、不安、劣等感、焦燥感 ・親に対する考えは、「親に会いたい」や「親が嫌い」 	<ul style="list-style-type: none"> ・親に会いたい気持ちが強い ・祖父母とのコミュニケーションが少なく、祖父母に理解されず ・教員や後見人は子どもの心の悩みに特別な関心がない

この表から、先行研究での指摘が調査対象村には当てはまらなかった課題と、逆に当てはまる課題を整理すると以下のようになる。

当てはまらない課題について、学校の課題から見ると、先行研究では校舎環境が劣悪で、寄宿舎がないため児童に給食を提供できないと指摘されていた。一方、調査対象村では、学校の校舎、トイレ、食堂などが建て直された。学校に寄宿舎はないが児童に 3 食を提供でき、児童の就学環境と食事の栄養バランスを取れることが保障されている。また、先行研究では、留守児童は学校をさぼる、無断欠席など態度に問題がある上に、学校と家庭のつながりが薄いため、教員が子どもの問題を後見人に伝えられないことがあると述べられていた。調査対象村では、留守児童の学校での態度は同じだが、教員が後見人の電話番号を持っているため、いつでも後見人と連絡を取れる。家庭の課題から見ると、先行研究では、後見人である祖父母は子どもの健康や衛生を軽視し、子どもの学業に対して無関心とある。調査対象の村では、祖父母は子どもの衛生面を十分に世話し、送迎時には祖父母が教員と話し合う姿勢が見られるなど子どもの学業に対して関心を持っていた。性暴力、不慮の事故については、先行研究では後見人と学校がともに留守児童の安全面を軽視していると指摘されていた。調査対象の村では、政府（県）、学校、家庭の 3 者が子どもの安全問題を重視している。犯罪の加害者になる問題に関しては、先行研究では、後見人が子どもの態度の悪さを注意せず、教員も成績が悪くてもあまり気にかけていないことに加えて、鎮や郷では遊戯施設など誘惑が多いことから、留守児童が犯罪を起こしやすいと指摘されていた。しかし、調査対象の村では、後見人が子どもを厳しくしつけを行い、教員は後見人や出稼ぎ先の親と連絡を取りながら成績や態度の悪い児童を指導していた。また鎮や郷とは異なり、村には遊戯施設など子どもを誘惑する場所がないことから、子どもが犯罪を起こす傾向は見られなかった。むしろ、先行研究では強盗や窃盗に関わる留守児童は中学生や高校生が大部分であるという調査結果もあり、小学校 4 年までしかない調査対象校では留守児童が犯罪に手を染める可能性は低いといえる。

次に、先行研究での指摘が同じように当てはまる課題について考える。学校に係る課題では、調査対象の村の学校も教員不足の問題が確認できた。家庭に関しては、後見人の学力不足のため、宿題など子どもの学業に適切な指導ができていなかった。精神的な影響では、先行研究で言われたように、調査対象の村では、留守児童が親に会いたい気持ちや後見人ともっとコミュニケーションを取りたいと思っている。しかし、後見人や教員の方はそれに気が付いておらず、留守児童は自発的に自分の悩みを言い出したくない。そのため、留守児童の心に生じた問題は長い間後見人に気が付かれず、こうした悩みや不満が積み重なり強い孤独感や焦燥感など深刻な精神的影響を受ける可能性もある。

これら 3 つの課題のうち、調査した村では教員不足と後見人が留守児童の学業の面倒を見られないという点は学校側がその改善に向けて取り組んでいることが調査からわかった。

前者については代課教師が授業を受け持つことで、後者については子どもに 3 食提供して学校にいる時間を長くさせ、その合間に教員が学業のサポートをすることで課題解決に取り組んでいた。そうした取り組みは問題解決のために十分といえる状況ではなかったが、少なくとも学校も後見人も問題を認識し、解決に向けた取り組みを行っていた。一方、精神的な問題については親や後見人、教員のいずれも留守児童が悩みや不安を抱いていることすら認識していなかった。そこで、本研究では留守児童の精神的な問題に焦点をあて、留守児童であることが子どもの精神／心理的状况にどのように影響を与えるか、その経験が将来大人になった元留守児童にどのような影響を与えているかを当事者の目線から元留守児童への聞き取りを通じて明らかにしようと考えた。

第4章 留守児童経験がもたらした精神的な影響

4.1 調査対象者の基本的情報

本章では、前章で提示した「留守児童が抱えている精神的な問題は、本人の成人後に至るまでの過程でどのような影響を与えているのか?」という問いに取り組む。調査対象は90年代終わりから2000年代初めの農村留守児童数が急増した時期に、自ら留守児童として暮らした経験を持っており、現在、20代後半になった人たちである。彼らは、留守児童体験が成人後の人生にどのような影響を与えたと考えているのか、振り返って自分の留守児童経験をどう捉えているのか、また、自らが親世代になるにあたって次の世代の子育てにどのような考えを持っているのか、インタビュー調査に基づいて論じる。

筆者は2016年8月5日から2016年8月25日にかけて、湖南省の省都の長沙市、広東省の省都の広州市と深圳市でインタビュー調査を行った。調査対象は、前章でフィールドワークを行った湖南省の澧澗村の出身で、子どもの時期に留守児童を経験し、現在、これらの都市に住んで仕事をしている8人である。調査対象の基本的な情報は以下のとおりである(表7)。

表7：インタビュー対象者の基本的な情報

<p>① Cさん 性別：女性 所在地：長沙市</p>	<p>留守児童時代の状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8歳の時から両親が出稼ぎ ・小学校1年～4年は祖父母と暮らす。祖父母は村で農作業に従事 ・小学校5年～中学校2年は出稼ぎ先で親と一緒に暮らす ・中学校3年の時に進学のため親と離れて帰村 <p>親とのコミュニケーション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電話での連絡：半月に1回、毎回1～2分程度 ・親の帰郷頻度：1～2年に1回、家で10日ぐらい滞在 <p>仕事状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2012～2014年、大学卒業後、対外貿易会社勤務 ・2014年～、インターネット店舗を経営 ・妊娠した後、退職。現在は無職 <p>婚姻状況：</p> <p>既婚、2016年8月に第一子を出産</p> <p>(将来は長沙で仕事を探したい。子どもの世話をする時間がない時には、自分の親を長沙に呼び、子どもの世話のサポートしてもらう)</p>
<p>②Jさん 性別：男性 所在地：長沙市</p>	<p>留守児童時代の状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・7歳の時から両親が出稼ぎ ・小学校3年の前半は祖父(父方)と後半は叔母(父方)と暮らす

	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校 4 年、別の村に転校し祖母（母方）と暮らす ・小学校 5 年～高校まで、自分の村に帰り、叔母（母方）と暮らす。ただし中学校 3 年と高校 3 年の時、進学のため、母は家に帰り子どもの世話 <p>親とのコミュニケーション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電話での連絡：週に 1 回、毎回 5 分程度、主に生活について ・親の帰郷頻度：毎年の春節。帰郷中コミュニケーションは少ない <p>仕事状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業後、電気関連の会社に 2 年間勤務 ・電気関連会社では知識の習得ができないと考えタバコ関連会社に転職 <p>婚姻状況：</p> <p>未婚</p>
<p>③F さん</p> <p>性別：女性</p> <p>所在地：長沙市</p>	<p>留守児童時代の状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10 歳の時、母が病気で他界。父は出稼ぎに ・高校 2 年まで祖父母と暮らす ・中学校と高校は学校に寄宿。月に 1 回祖父母の家で過ごす <p>親とのコミュニケーション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・父とはあまりなし。電話連絡もほとんどせず <p>仕事状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校 3 年の時、家計の問題で中退 ・中退後、東莞市や恵州市の工場勤務、湖北省や長沙市で営業の仕事に従事 ・出稼ぎ期間中、独学で専科学校の学歴を取得し、会計関連の会社で 1 年間勤務 ・出産のため退職。現在は無職 <p>婚姻状況：</p> <p>既婚 子どもは 0 歳 (現在、夫婦、子ども、夫の親と一緒に長沙で暮らしている。)</p>
<p>④TQ さん</p> <p>性別：男性</p> <p>所在地：長沙市</p>	<p>留守児童時代の状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10 歳から両親が出稼ぎ ・祖父母とずっと暮らす。祖父母は村で農業に従事 ・2016 年現在も両親は出稼ぎ <p>親とのコミュニケーション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電話での連絡：数ヶ月に 1 回、毎回 2～3 分程度 ・親の帰郷頻度：1～2 年に 1 回、家に帰っても、親戚との付き合い中心で子どもとほとんど交流なし

	<p>仕事状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学校の時学業への興味を失い中退 ・温州市、新疆自治区、河北省などで勤務。縫製工場経営、現在はトラック運転手 <p>婚姻状況：</p> <p>未婚</p>
<p>⑤JLさん</p> <p>性別：男性</p> <p>所在地：深圳市</p>	<p>留守児童時代の状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4歳の時母が他界。父は出稼ぎへ ・祖父母と暮らす。祖父は村で教員として勤務。学費などは祖父が支払い <p>親とのコミュニケーション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連絡：普段はほとんど連絡せず ・親の帰郷頻度：春節のみ <p>仕事状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校2年の時中退。深圳市や河北省で工場労働者や美容師として勤務 ・現在パソコンの部品生産工場に勤務 <p>婚姻状況：</p> <p>未婚</p>
<p>⑥QQさん</p> <p>性別：男性</p> <p>所在地：深圳市</p>	<p>留守児童時代の状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園児の時、両親が出稼ぎに ・祖父と暮らす。祖父は農業に従事 ・小学校6年の時、母は帰郷し弟を出産。その後、母は村の家で一緒に暮らす ・中学校と高校の時、平日は学校に寄宿し週末は家で過ごす <p>親とのコミュニケーション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電話で連絡：重要なことがある時、主に母親と連絡 ・親の帰郷の頻度：春節の時に、たまに家に帰る <p>仕事状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校の時中退。東莞市、貴州省、山東省、河南省などで働く <p>婚姻状況：</p> <p>未婚</p>
<p>⑦YYさん</p> <p>性別：男性</p> <p>所在地：深圳市</p>	<p>留守児童時代の状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・11歳の時両親が出稼ぎに。現在も出稼ぎ中 ・祖父母と暮らす。祖父母は農業に従事 <p>親とのコミュニケーション：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電話での連絡：たまに電話で生活や成績について話し合う

	<p>・親の帰郷頻度：春節のみ</p> <p>仕事状況：</p> <p>・高校の時中退。海南省、広西省などで電気技師の仕事に従事</p> <p>・現在も深圳の工場の電気技師</p> <p>婚姻状況：</p> <p>未婚</p>
<p>⑧BBさん</p> <p>性別：男性</p> <p>所在地：広州市</p>	<p>留守児童時代の状況：</p> <p>・小学校に入ってから中学校卒業まで、父親は断続的に出稼ぎへ。その間は母親と家で暮らす。</p> <p>・中学校卒業から大学まで、両親とも出稼ぎに</p> <p>・高校は学校に寄宿。月に1回祖父の家で過ごす</p> <p>親とのコミュニケーション：</p> <p>・電話での連絡：電話料金が高いためあまり連絡せず</p> <p>・親の帰郷頻度：中学校卒業まで、父親は3ヶ月～半年に1回、家に帰った。家に2,3ヶ月ほど滞在し、新しい仕事があったら、また出稼ぎに行った。中学校卒業後、両親は春節しか帰らなかった。</p> <p>仕事状況：</p> <p>・大学卒業後杭州で半年間インターンシップ。その後、広州でITの仕事に従事</p> <p>婚姻状況：</p> <p>既婚</p> <p>妻は双子を出産。現在、妻と子どもは農村で親と暮らす</p>

インタビュー調査に基づき筆者作成

調査対象者は2つの基準で選定した。第1に生まれた年である。すでに述べたように、2000年から2005年にかけて中国の農村留守児童数が急激に増加した。この時期に留守児童の小学生だった世代は現在20代半ばから後半になっている。幼児期から思春期にかけて出稼ぎが原因で親と一緒に暮らせなかった人たちが大量に社会人となり、新しい親の世代を形成し始めている。本調査では、この留守児童拡大期に小学生の留守児童を経験した人たちを対象とするため、1990年前後に生まれた人にインタビュー調査を行った。第2は出身村である。その理由の1つ目は、全員同じ村の出身者にすることで、村の経済社会状況の違いが対象者の回答に及ぼす影響を極力なくするためである。それによってインタビュー対象者を比較する軸が個人的な事情に絞ることができると考えた。もう1つはインタビューの実施可能性である。同じ村出身の元留守児童で年齢が近い男女を複数探しインタビューの承諾を得ることは簡単ではない。そこで、留守児童が多い澧澗村出身の20代後半の筆者の友人に紹介を依頼した。紹介を受けて筆者が連絡を取った人たちのうち、インタビュ

一の許可を得られた 8 人にインタビュー調査を行った。

出稼ぎに行った親について、F さんと JL さんは幼い頃に母親が亡くなり、父親が出稼ぎに行っている。BB さんは中学生の時までは父親だけが出稼ぎをし、高校生になってからは母親も出稼ぎに行った。他の 5 人は、小学生や幼稚園児の時から両親が出稼ぎに行っている。8 人の出稼ぎに行った親は、春節にしか帰らず、普段は電話で短時間だけ子どもと話をする程度だった。

留守児童だった 8 人はみな働いた経験を持っている。J さん、C さんと BB さんは大学卒業後、会社に勤めている。他の 5 人は、高校までの間に中退し、都市で出稼ぎしている。

婚姻状況については、C さん、F さんと BB さんは既婚で子どもがいるが、他の 5 人は未婚である。第 2 章 3 節で述べたように、義務教育を中途退学した留守児童は自分の親と同じように農民工となり、その子どもたちがまた留守児童になるという悪循環に陥る懸念がある。本調査の目的の 1 つは留守児童経験を持つ大人の、次の世代の子育てに対する考えを明らかにすることである。すでに親となった 3 人にとって、子育ては身近な問題で大きな関心事であるため、子どもをどのような環境でどう育てれば良いかなどについて具体的に考えていると推察される。

本調査では対象者に対して 1 人ずつ半構造化インタビューを行った。

4.2 元留守児童に対する質問内容の設定

調査対象に対するインタビュー内容は 4 点ある。第 1 に、留守児童時代の経験がそれぞれのインタビュー対象者に与えた影響が家庭環境とどのような関係性があるかという点である。親のどちらがいつ出稼ぎしたか、留守児童の頃は誰と暮らしていたか、学校の状況、今までの仕事、婚姻などについての基本的な質問をした。第 2 に、留守児童であることがどのような精神的な苦痛を与えたかを明らかにするために、調査対象者の留守児童経験について質問した。具体的には、出稼ぎ先の親とのコミュニケーション、祖父母の育て方に対する考え、今まで持っていた悩み、留守児童時代への不満などである。第 3 に、留守児童の経験が今までの生活に与えた影響を明らかにするために、学業を終えてからの仕事について尋ねた。具体的には、それぞれの仕事を選んだ理由、仕事に対する態度、職場での同僚や上司との関係などである。第 4 に、留守児童が次の世代の留守児童を生むことにつながるのかを考察するために、家族や子育てに対する考えについて質問した。具体的には、子どもが生まれたら誰と暮らすのがいいと考えるか、子どもの教育に対してどんな考えを持っているかなどである（具体的な質問内容は巻末の別紙 4 を参照）。

4.3 留守児童経験の影響

インタビュー調査の結果、以下に述べるように、かつて留守児童だった経験が成人後も性格面や対人コミュニケーションの面で影響を与えていると本人たちが感じていることがわかった。

4.3.1 元留守児童が自覚する性格への影響

話を聞いた8人とも留守児童の経験が自分の性格形成に影響を与えたと考えていた。JさんとFさんは、親が出稼ぎで不在だったことが自分の内向的な性格につながったと考えている。Jさんは、親以外の人に心を打ち明けにくいため、だんだん自分の考えや気持ちを表に出さずに心の内に隠すようになった。

「お母さんが家にいた時、私の性格形成に少しプラスの影響があったと思います。お母さんとのコミュニケーションはあまり多くなくても、自分の精神状態は良くなりました」⁶⁶

「親が出稼ぎに行った後は、自分の考えを他人と話したくないと思うことが多くなりました。長い期間、親戚と暮らしていたので、自分の考えや気持ちを親以外の人に話しにくいです。自分の家ではないので、自分が居候のような感じがするんです」⁶⁷

祖父母や叔父、叔母など一緒に暮らす親戚が変化したJさんにとって、親戚と暮らすことは堅苦しいと感じ、不安感を強く持たせた。親戚とは、親との間ほどには親しい関係になれないので、Jさんは「自分の気持ちを口にすると、親戚に無視され、嫌われるかもしれない」という不安感を持っていたという。一方、親が自分のそばにいと、コミュニケーションの回数などとは関係なく、不安感が減り、自分の考えや気持ちをうまく話せると話していた。親戚との間にお互い信頼感を持つことができず、Jさんは親戚に対して、不安やある種の恐怖感が生じていた。長い期間、他人とコミュニケーションを取らないようになってしまった。

Jさんは親と叔母の間の衝突を避けるために、叔母に対する不満をずっと抑えていたが、家から逃げたい気持ちが強かったという。

「叔母さん（母の方）と暮らしていた時期の不満はちょっとあります。叔母さんには2人の子どもがいて、私を入れると3人の子どもを育てたわけです。叔母さんはストレスが大きいので、時々、不満や焦燥の気持ちを私にぶちまけたんです。例えば、叔母さんは家の衛生を重視しているので、もし私が家でどこかを汚したら、厳しく叱られました。でも、自分の子どもに対する叔母さんの態度は違います。私の考えでは、叔母さんは『子どもを世話してくれる？』というお母さんの頼みを断りにくいため、引き受けただけなんじゃないかって。でも、時間がたつにつれて、不満がだんだん表に出ていたかもしれません。私は叔母さんの態度に

⁶⁶Jさんへのインタビュー、2016年8月8日、家に近い喫茶店で

⁶⁷同上

対して、ずっと我慢していました。でも、叔母さんの家から逃げたい気持ちが強かったです」⁶⁸

Jさんの話を聞いていて、筆者はなぜ自分の悩みを親に教えないか疑問に感じた。それに対してJさんは次のように答えた。

「親に迷惑をかけたくないからです。もし私がそのことを親に言ったら、親と叔母さんの関係は悪くなるかもしれないから」⁶⁹

現在は叔母さんのもとから離れ、1人暮らしをしているJさんは、仕事をする中で、自分の性格に困ることがしばしばあるという。

「私の性格は、『いじめられやすい』と言われます。仕事上、そういう経験もあります。前の会社で、女性の同僚のグラフ作りを手伝ってあげたんですが、提出が遅くなったため、お客さんからクレームを受けたことがありました。その同僚は大きな声で私を叱ったんです。上司はこのことを知って、女性である同僚の肩を持った。この件については、私にも責任があるけど、私を叱るやり方は受け入れられませんでした」

Jさんは同僚と上司の自分への態度に強く不満を感じ、それを「いじめ」と表現した。Jさんは上司に言い訳をしなかった。

「正直言って弁解することが苦手です。問題が解決できないと感じたら、そのまま我慢してしまいます。何か問題にぶちあたったら、解決策を深く考えたくないので逃げたいとだけ思ってしまう」

Jさんは、親と親戚の間に衝突を起こさせないために、親戚への不満を我慢してしまった。それ以後、誤解されたり、叱られたりした時に、自分の考えや気持ちを自分から他の人に話せなくなったという。Jさんにとって、問題に遭った時、一番いい解決方法は我慢することや逃げることである。

Fさんは、自分から見て親の愛情が注がれている子どもを羨ましく感じたという。それに比べて、自分のことを気にしてくれる人がいないことに気づき、内にこもるようになり、劣等感を持つようになった。

⁶⁸Jさんへのインタビュー、2016年8月8日、家に近い喫茶店で

⁶⁹同上

「中学生の時、クラスメート A の母親が A の面倒を見るために、わざわざ学校の近くで部屋を借りたんです。その時、A のことが本当に羨ましかったです」⁷⁰

F さんの内にこもる性格はどのように形成されたのだろうか。筆者の質問に対して F さんは次のように答えた。

「家庭環境と関係があるかもしれません。1つは家計の問題で、もう1つは自分のことを気にかけてくれる人がいなかったことだと思います。他の子の親のように、子どもの生活や勉強を心にかけてくれる人はいませんでした。今では、努力して生活を改善して、自信を持つようになって、性格もよくなったと思うけど、あの頃の自分には本当に劣等感がありました」⁷¹

F さんに対して、「どのような点から自分のことを気にかけてくれないと感じたか」と質問すると、F さんは次のように答えた。

「お父さんは時々春節でも帰らなかった。自分の生活や学業のことはお父さんにほとんど聞かれなかった。その頃のお父さんについての記憶はあまりない。(中略)普段はほとんど連絡しなかった。何か重要なことがあれば、祖父母に電話してくれた。でも、電話しても、私と話したことがない。お父さんは私の気持ちや考えなど聞かなかったし、生活や学業など日常生活に関することすら聞いてくれなかった」⁷²

「祖父母も自分のことを気かけなかった。子どもの頃、妹と喧嘩したことがある。その時、祖父母は喧嘩したことを全然気にしなかった。祖父母は子ども同士で喧嘩するのは当たり前だと思っていた」⁷³

F さんが内にこもったり、劣等感を持っていたりしたことは理解できたが、それはどの程度深刻だったのだろうか。筆者が「内にこもった時はどのような状態ですか」と尋ねたところ F さんは次のように答えた。

「その頃、誰にも話したくありませんでした。高校のクラスは 60 人いたけど、私が話したことがある人は数人しかいませんでした。それも仲がいいという関係で

⁷⁰F さんへのインタビュー、2016 年 8 月 10 日、家に近い喫茶店にて

⁷¹同上

⁷²同上

⁷³同上

はなくて、ただ話したことがある程度。大部分の人とは話したことすらありませんでした」⁷⁴

Fさんは、他の子どもの母親が子どもの世話をするために学校近くに部屋を借りたという一見すると些細な出来事にも大きく心を動かされた。部屋を借りた理由は定かではないのに、それを親の愛情と結びつけて考えていたのである。それは裏を返せば、親の愛情を受けたいという気持ちの表れだったのではないか。また、父親がFさんに対して無関心といえる態度であり、祖父母は自分のことを気にしなかったため、Fさんは自分の気持ちを話せる人がおらず、だんだん周りの人と話し合いたくなくなった。

JさんとFさんは、留守児童の経験が、内向きの性格や劣等感につながったと自分で思っているケースだったが、インタビュー調査を行った8人の中にはある意味で正反対のケースもあった。TQさんとQQさんは、自分の気持ちや話が後見人である祖父母にしばしば無視されたため、気性が激しくなったと語っている。TQさんは、留守児童だった時期に、心の中の怒りを話せる人がいなかったため、自分勝手なやり方で怒りを周りに当たり散らすしかなかったという。

「友だちと殴り合った時、友だちは家に帰って、親にそのことを言えるけど、私には話せる人がいませんでした。祖父母は年寄りだから、殴り合いのことを言っても無視されました」⁷⁵

仕事を始めてからも、TQさんは何か解決できない問題があれば、暴力に訴えることがあるという。

「以前、縫製工場を経営していた時、お客さんから代金をもらえなかったため、お客さんと衝突したことがありました。私は仕上げた洋服をお客さんに送ったのに、お客さんはすぐ代金を払えず支払いが滞ったんです。でも、私は必ず給料を払わなければならなりません。それで、お客さんと殴り合いの喧嘩になりました。最後に、警察官を呼んで、相手はお金を払ったのですが」⁷⁶

TQさんが怒りを覚えるような時に、ちゃんと話を聞いてくれる人がいない。TQさんは暴力によって、自分の怒りを当たり散らさざるを得なかった。TQさんの乱暴な行為や考えを諭す人もおらず、TQさんの気性はますます激しくなったという。また、現在の仕事でも、怒りやすい状態が続いている。

⁷⁴Fさんへのインタビュー、2016年8月10日、家に近い喫茶店にて

⁷⁵TQさんへのインタビュー、2016年8月13日、喫茶店にて

⁷⁶TQさんへのインタビュー、2016年8月13日、喫茶店にて

QQさんは、留守児童の時期に持った嫉妬心と、その後の激しい気性をつなげて次のように語っている。

「子どもの頃、親と一緒に暮らしている子はお小遣いをもらえらと思っていました。でも、自分は何ももらえない。おじいさんにお小遣いがほしいとは言いたくなかった。恥ずかしいからです。子どもは嫉妬心があるから、他の子どもにはあって、自分にはないものがあっても、自分の気持ちを話したくはなかったです。それが、時間がたつにつれて激しい気性につながったんだと思います」⁷⁷

一方で、留守児童の時代、QQさんは出稼ぎの親に対しても多くの不満を抱えていたという。

「16、17歳の反抗期の時、『なんで他の子どもはなんでもあるのに、私は何もないか?』という文句がいっぱいありました。その時、私は親の言うことに従わないだけではなくて、いつも親の言うことの逆をやりました。その頃、親は私と考えや気持ちについてほとんど話をしなかつたし、親から小遣いももらえませんでした。だから、その頃の自分は、怒りっぽくて、他の人と殴り合いになりがちでした」⁷⁸

他の子どもは何でも持っていて、自分には何もないかのように考えた理由は何か。QQさんは具体的に以下のように語っている。

「たくさんある。例えば、他の子どもは学校から家に帰ったあと、ご飯などが全部準備されていましたが、私の場合、おじいさんが帰ってこない時は自分で用意をしなければなりません⁷⁹。時々、おじいさんは私にご飯を作ってくれたけど、おじいさんが作った料理が好きではないから、私はすぐに怒ってしまうんです。親との電話で自分の不満を話したくないです。話しても、口喧嘩になると思うので」

QQさんは、他の子どもが親から小遣いをもらっており、日常生活の面倒は親がよくみていると感じられたため、なぜ自分の親や祖父母は何もしてくれないかという疑問や嫉妬心があった。自分の不満を伝える相手がいなかったため、不満は長期間たまり、激しい気性につ

⁷⁷QQさんへのインタビュー、2016年8月16日、レストランにて

⁷⁸同上

⁷⁹第3章で述べたように、現在はこの小学校では3度の食事が提供されているが、当時はなかったことが伺える。

ながつたと考えている。

4.3.2 コミュニケーションに関わる影響

8人の調査対象者のインタビューからは、留守児童の経験がその後の性格形成に影響を与えたという意見と同時に、対人コミュニケーションに影響があったと自覚している声が聞かれた。本項では、対人コミュニケーションの問題について取り上げる。なお、前項でも述べた通り、以下の問題はあくまでインタビュー対象者が自覚している影響である。留守児童を経験するとこのような問題を抱えるようになるという因果関係や相関関係を論じるつもりはない。重要なのはこれらの点を、元留守児童たちが、留守児童の経験とつなげて認識していることである。

インタビュー対象者が留守児童の経験とつなげて語った対人コミュニケーションに係る問題の第1は自信の喪失である。JLさんは、留守児童の頃、出稼ぎの父親とのコミュニケーションが不足していたため、電話で話したり直接会ったりした時に、いつも父親に理解してもらえず否定されたと感じている。その結果として、JLさんは自信がなくなると述べている。

「お父さんは細かいことも気にしないんです。また、長い期間外で出稼ぎして、私とあまり接触しないから、私が何を考えているかもわかりませんでした」

JLさんは、父親が自分のことを否定し、理解できないため、だんだんと自信を持ってなくなったという。どのような点で父親からの理解やサポートがほしかったのか。

「正直に言うと、私が何かをやりたい時に、お父さんには私を支持してほしいんです。何かアドバイスをもらいたい。以前、友だちと一緒に縫製工場をやりたいとお父さんに話したところ、お父さんは私に自信がない(私の能力を信じていなかった)ため、賛成しませんでした」⁸⁰

「以前、美容師をやっていた時、私自身はやり続けたいと思っていましたが、お父さんからこの仕事はあまり将来性がないと言われたんです。私はお父さんにかなり影響されていたので、やる気を失って最終的に美容師を諦めました」⁸¹

出稼ぎに行っている親は長期間子どもと離れていたため、子どもの成長過程をよく知らない。そのため、子どもの考えや気持ちを十分理解できないことは想像に難くない。物理的に離れているだけでなく、親子のコミュニケーションがあまりないため、JLさんの場合、

⁸⁰JLさんへのインタビュー、2016年8月15日、ファストフードレストランにて

⁸¹JLさんへのインタビュー、2016年8月15日、ファストフードレストランにて

やりたいことができ親に話したとしても、親は JL さんが「なぜやりたいか」「どうやってやるか」など具体的なことを知らないため、進路のような大切な話をするために必要な信頼関係を親との間に築けないでいる。そのため、JL さんの能力を親は信じることができず、失敗を避けるために、JL さんの考えや選択を否定するだけでなく、自分の気持ちや考えを押しつけたと考えられる。親は JL さんの将来や人生のためによく考えて言っているつもりだろうが、JL さんにとっては、親に信頼されていないと感じることで自信を失ってしまったのである。

2 つ目の影響は大人になった後も親子のコミュニケーションに困難を感じている点である。QQ さんは、今に至るまで親に理解されてないと感じるため、親とのコミュニケーションが嫌いで、避けたいと考えている。

「現在は、お母さんと全く話していません。私が言ったことをお母さんは全然理解してくれないんです。お母さんが私のことをわかってくれないと、私はすぐにカッとなってお母さんと喧嘩してしまいます。なので、私は喧嘩を避けるために、家を出て夜まで帰ってこないことがあります」⁸²

QQ さんが小学校 6 年生の時に、母親は弟の出産のために村に戻り、それ以降は子どもたちと一緒に暮らしていた。

「お母さんが家に帰ったあと、お母さんと話せることがなくて、一緒に座っても、居心地が悪くなりました。母親たちと家にいるより、1人で家から出た方がいいと思うようになりました。正直に言うと、親とのわだかまりが深く存在しているんです」⁸³

両親とも離れている留守児童に比べて、QQ さんの場合は小学校 6 年生の時から母親と一緒に暮らしていた。その意味では、親とのコミュニケーションは比較的円滑にできたのではないか。この点について、QQ さんは次のように述べた。

「現在でも親との間で話せる話はほとんどなくて、沈黙する場合がよくありました。小さい時、お母さんが毎回電話してくれて、主に生活や学校のことを聞いてくれました。その時も、私はただ『はい』『いいえ』と簡単な言葉で答えていました。学校のことをお母さんにほとんど話しませんでした。というのも、私が何か言うと、お母さんは 1 つのことをめぐって、ずっとぶつぶつ言うからなんです。私は気性が激しいから、お母さんと口喧嘩になりやすい。喧嘩することを避ける

⁸²QQ さんへのインタビュー、2016 年 8 月 16 日、レストランにて

⁸³同上

ために、だんだんお母さんとコミュニケーションしたくなくなりました」⁸⁴

もう1人、今現在も親とのコミュニケーションがうまくできないと話してくれたのはYYさんだった。

「私は親とコミュニケーションすることが苦手です。現在、お父さんとたまに電話しても、話せることが少ない。実はお父さんは他の人とコミュニケーションする時にはたくさん話すんです。でも、私とはあまり話しません。親とコミュニケーションしないことに対しては、もう慣れました」⁸⁵

QQさんが子どもの時、親とのコミュニケーションが不足していたため、親は子どもの考えを十分に理解できず、問題があった時には子どもの気持ちや子どもの立場から考える意識がなく、自分が正しいと思ったやり方でしか子どもを教育しなかった。しかし、この態度や考えはQQさんに受け入れられないだけでなく、QQさんの嫌な気持ちを引き起こさせてしまった。これにより、QQさんは気性が激しくなりやすく、親と喧嘩することを避けるために親と話さなくなったと本人は考えている。YYさんの場合、親自身が自発的に子どもとあまり話さない。そのため、子どもは親と話さない状況に慣れてしまい、親とコミュニケーションしようという意識もなくなった。

元留守児童であるインタビュー対象者が、留守児童経験が今に至るまでの自分に影響を与えたと自ら考えている3つ目の側面として、自立心や独立意識が挙げられる。

「小学校3年より前は、自分の年齢も小さいから、何か解決できない時、頼れる人がほしかったです。小学校4年くらいになるともう10歳になって、お腹がすいた時、自分で料理ができて、自分は独立して、何か問題があると、自分で解決できるから、親の生活面での助けはもう要らないとを感じるようになりました」⁸⁶

「問題があっても親は私を助けることはできませんし、役に立つアドバイスももらえませんでしたから、私は何でも自分で解決しなくてはいけませんでした。だんだん自分で自立して何かをする能力が育っていきました」⁸⁷

⁸⁴QQさんへのインタビュー、2016年8月16日、レストランにて。当然ではあるが、親子のコミュニケーションの問題は、必ずしも離れているから生じるわけではなく、一緒にいてもうまく会話ができない親子もいる。本研究では、あくまで元留守児童が何を原因だと認識しているかに依っている。

⁸⁵YYさんへのインタビュー、2016年8月17日、工場の寮に近い公園にて

⁸⁶QQさんへのインタビュー、2016年8月16日、レストランにて

⁸⁷BBさんへのインタビュー、2016年8月21日、家に近いマクドナルドにて

QQさんは、問題や困難が生じた時、自分を助ける人がいないことを意識したため、自力で問題を解決せざるをえないと感じていた。QQさんは親の出稼ぎにより、自分で何でもやることの重要性を子どもの時期から意識していたため独立意識やその能力が強くなった。BBさんの場合、親と別れて暮らしていたため、親は自分のことをよく知らなかった。親は自分を助けたくてもどうやって助ければ良いかわからないため、BBさんは親に頼るより、自分に頼ったほうが良いという考えから独立意識が生まれたようである。

4.3.3 次の世代を留守児童にしない

すでに述べたように、筆者が元留守児童へのインタビュー調査を行った理由の1つに、「留守児童が次の世代の留守児童を生む悪循環」に陥っていないかを、限られた調査対象数ではあるが考察を加えたかったからである。先行研究や湖南省での調査結果から、特に90年代以降の中国の都市部を中心とした経済発展が、農村の留守児童を急増させ、子どもたちに多くの困難を与えてきたことは明らかである。留守児童が急拡大して15年以上が経過し、そうした経験をした子どもたちも成人して労働市場に参入している。そこで懸念されるのは、元留守児童が自分の親と同じように農民工となって都市で働き、自分と同じような留守児童を生み、この問題が次の世代にも続くことである。もちろん、留守児童の発生には中国の独特な戸籍制度をはじめとする社会の仕組みが大きく影響している部分もある。それらが改革されることで、この悪循環が回避される可能性はあるだろう。その一方で、本研究が明らかにしたように、親の意識が子どもに与える影響は小さくない。仮に出稼ぎをすることになっても親がどのくらい子どもの気持ちに寄り添おうとしているかは、留守児童の心の問題を和らげるためには重要な要素である。そこで、本章の最後に、調査対象の元留守児童が、20代後半になって自分の子どもをどのように育てようと考えているのかを、インタビュー調査をもとに考察する。

インタビューした8人全員が、結婚して子どもができれば自分の子どもと一緒に暮らしたいと考えていた。このうち、Jさん、QQさんとYYさんは、子どもと一緒に暮らしたい気持ちはあるが、現在仕事と生活が不安定なので、子どもを育てるための十分な経済基礎ができるまでは、子どもを作ることはあまり考えないと答えていた。調査した時点ですでに子どもがいたCさん、Fさん、BBさんは、子どもと一緒に暮らしたい気持ちが強い。Cさんはその理由を次のように述べた。

「子どもと一緒に暮らしたいです。もし、仕事が忙しくて私に時間がない時は、私の両親も一緒に長沙で暮らしてもらい、子育てを手伝ってほしいと思います。少なくとも、私は毎日家に帰って、子どもの面倒を見ることができて、子どもとコミュニケーションできるようにしたいです。そうすることで、子どもがどのように成長しているのかがだいたいわかりますから」⁸⁸

⁸⁸Cさんへのインタビュー、2016年8月7日、自宅

FさんとBBさんは、子どもに自分と同じ経験をさせたくないので、子どもと一緒に暮らしたいと述べた。

「私の親に長沙に来てもらって、私たちと一緒に暮らして、子どもの世話をしてほしいです。そうすれば、私は毎日家に帰ったあと、子どもの面倒を見られます。子どもは小さいので、性格の形成とか、生活習慣とか、私から教育やしつけを行う必要があると思います。私自身の経験と関係があるかもしれませんが、私は親の愛情を感じたことがないから、自分の子どもには同じ経験をさせたくありません」⁸⁹

「将来は家に近い長沙へ行きたいです。給料は今いる広州より低いけど、生活費も同じように安いし、ストレスがそんなに大きくありません。私は家庭を重視したいので、自分の子どもには私のようになってほしくありません。親が子どものそばにいないと、子どもにとってはよくないと思います。私の親の出稼ぎが私に与えた影響はそんなに深刻ではなかったけど、私が経験したことを自分の子どもには経験させたくないです」⁹⁰

また、TQさんとJLさんはまだ結婚していないが、留守児童時代の経験が今も辛い記憶として強く残っているため、子どもと一緒に暮らしたい気持ちが強い。

「(子どもができれば)自分と暮らしたほうが良いと思います。現在、私はお父さんとの間にわだかまりが深く存在していて、子どもと私の関係をお父さんと私のような関係にはしたくないからです。お父さんは現在、私の精神的な側面を重視するべきだという意識がありますけど、私は彼と何も話したくないです。だから、子どもとのコミュニケーションが重要だと思います。私自身の経験で、親は子どもの生活を気にするだけではなくて、子どもの心理的な変化に気づくことがもっと重要だと思います」⁹¹

「もし子どもがいれば、農村に残したくないです。自分は経験したことがありますが、農村に残したら、子どもを気にかける人がいません。また、親の愛情が欠如するから、子どもの性格に影響を与えるかもしれません。私は気性が激しいので、もし子どもが何か間違いを犯したら、子どもとうまく話し合えない

⁸⁹Fさんへのインタビュー、2016年8月10日、家に近い喫茶店

⁹⁰BBさんへのインタビュー、2016年8月21日、家に近いマクドナルド

⁹¹JLさんへのインタビュー、2016年8月15日、ファストフードレストランにて

と思うんです。そうすると、子どもは反抗的な気持ちが強くなるかもしれません。時々、留守児童だった経験を思い返すと、もしあの時親や祖父母が私と頻りに話をしてくれていたら、祖父母や親のこゝろを受け入れられていたと思います」⁹²

Cさん、FさんとBBさんは現在子どもがいるため、子どもの将来の生活と教育という立場から考えている。留守児童だった頃に経験したことは自分にとって辛いと感じさせるものであった。そのため、子どもに自分と同じような経験をさせたくないと考えている。子どもには幸せに成長してほしいので、子どもと一緒に暮らしたい気持ちが強い。また、JLさんとTQさんは、子どもの頃、親や祖父母とのコミュニケーション不足によって引き起こされた影響は今まで続いているため、問題の深刻さを十分に感じている。そのため、子どもと一緒に暮らしたい気持ちは子どもがいる3人と同じように強い。

ところで、インタビューした元留守児童が、自分たちの子どもを留守児童にはしたくないと考えていることがわかったが、その中で、「親を長沙に呼んで」とか「将来は長沙で」という発言があった。これはすなわち、農村で親子が一緒に暮らすということではなく、子どもを含めて三世代で地方都市に暮らすことで留守児童を「再生産」しないという考えを意味している。そのためには戸籍制度との関係が重要である。国務院は2016年10月に「推动1亿非户籍人口在城市落户方案（1億の農村戸籍人口の都市定住を推進する政策）」を発表し、その第4項⁹³で農村戸籍を持つ人たちが都市に定住する条件を緩和する方針を打ち出した。これにより、農村人口の長期間にわたる都市での居住と就業が促進され、農村戸籍を持つ人たちのうち、主に大学卒業生、技術工、専門学校卒業生、留学経験者は都市で定住することが可能になった。

インタビューしたCさん、JさんとBBさんは大学卒業である。Fさんは高校を中途退学したが、出稼ぎ中に、独学で会計資格⁹⁴を取得した。YYさんは現在電気技師の仕事に従事しているため、都市に定住することが可能になった。そのため、農村戸籍を持つCさん、Jさん、BBさん、Fさん、YYさんは将来都市で子どもと一緒に暮らしたいと望めば、現在戸籍制度上の障害がないためその想いは実現する。一方で、JLさん、TQさんとQQさんは、大学を卒業しておらず、資格などの専門知識や専門学校で習得した技術、企業や工場での経験を持っていないため、将来子どもと一緒に都市で暮らしたいと思っているものの、現段階の政策上はその想いは実現しない。

本節の始めに述べた「留守児童が次の世代の留守児童を生む悪循環」という懸念につい

⁹²TQさんへのインタビュー、2016年8月13日、喫茶店にて

⁹³国務院「推动1亿非户籍人口在城市落户方案（1億の農村戸籍人口の都市定住を推進する政策）」、国務院ホームページ

(http://www.gov.cn/zhengce/content/2016-10/11/content_5117442.htm 閲覧日 2016年12月27日)

⁹⁴会計資格は、会計に関する仕事に従事するために必要な資格である（李・王 2012）。

ては、元留守児童が子どもと一緒に暮らすことを望んでいることから少なくとも意識の点では明るい展望が見える。また、国务院の政策変更に見られるように、都市と農村の二元戸籍制度は一段と緩和されることになり、農村戸籍の元留守児童たちが、そのまま都市で家族と一緒に暮らせる道が制度的に開け始めた。その一方で、農村戸籍を持ち、子どもと一緒に都市で暮らしたいと考えている人たちは、都市での定住が認められないため、留守児童の「再生産」の懸念は依然として残っている。さらに、元留守児童が子どもと一緒に都市に定住できたとしても、それは農村に住む子どもの減少を意味し、農業の担い手が不足し、農村が更に疲弊する悪影響をもたらしかねない。留守児童数を減らすという意味では一定の効果が期待できるが、中国農村の根本的な問題の解決にはつながらず、農民工の都市定住による新たな問題⁹⁵につながる懸念もある。

4.4 留守経験がもたらした影響

本調査は「留守児童としての経験が成人後の人生にどのような影響を与えたと考えているのか」「自らが親世代になるにあたって次の世代の子育てにどのような考えを持っているのか」という2つの問いを掲げて行った。結果は次のとおりである。

留守児童の経験の与えた影響について、調査対象者は、主に性格面とコミュニケーション面の影響を強く自覚していた。性格面の影響について、Jさんは、親戚との間に信頼感が欠如しているため、親戚に心を打ち明けにくい。その上、自分の気持ちを親にも伝えられず、問題と向き合う時は内向きであるため我慢するようになった。Fさんは、親とのコミュニケーションが欠如したため、親から愛情を受けていなかったという感覚が強く、それにより自分に劣等感を持たせ、内にこもるようになった。一方、QQさんとTQさんは、不満がある時、その思いを伝える相手がいないため、不満が怒りっぽさになり、気性が激しくなったと自己分析をしている。内向的であれ、激しい気性であれ、留守児童としての経験が自分の性格に与えた影響を否定的に捉えていた。その原因の1つは、親や後見人とのコミュニケーションの欠如である。コミュニケーションの不足は、自分が気かけられず、理解もされていないと強く感じさせた。こうした親や後見人からの関心や愛情を感じられない環境が、性格に否定的な影響を与えたとインタビュー対象者が自覚していた。留守児童経験が性格をどのように形成するのかは本研究が明らかにする点ではないが、少なくとも自分の性格の否定的な側面と留守児童経験をつなげて考えていることは注目に値する影響である。

コミュニケーションの面について、調査対象者へのインタビューから、親子のコミュニ

⁹⁵2014年3月に中国政府が打ち出した「新型都市計画」によって農民工を大都市から地方都市に移し、そこで都市戸籍を認めようとしている。しかし、この計画をめぐっては、すでに地方都市に雇用がない、大都市で農民工が住んでいるアパートが取り壊され強制立ち退きを迫られているなど深刻な問題が起きている。(NHK <http://www.nhk.or.jp/kokusaihoudou/archive/2016/12/1221.html> 閲覧日 2017年1月9日)

ケーション不足により引き起こされた影響は3点あると考えられる。第1に、JLさんは、親子の信頼関係が欠如していたため、親に自分の能力を疑われたことが自信を喪失させた。第2に、QQさんとYYさんは、親子の間でどうコミュニケーションすれば良いかいまだにわからない。第3に、QQさんとBBさんにとっては、親がすぐに自分を助けられない環境が、独立意識を高めた。調査対象者の回答を見る限りでは、特定の影響が顕著に発生するとは言い難いが、少なくとも留守児童の時期に親とのコミュニケーションがうまくとれなかったことは成人後に至るまで様々な影響を与えている可能性がある。成人後も自信を持てなかったり、親子でコミュニケーションができなかったりすることで、留守児童と親の繋がりはさらに薄くなりかねない。また、独立意識の高さはプラスの影響のようにも見えるが、見方を変えると何か問題があっても親に助けを求めないことにつながる。その意味では、親子の関係をますます希薄なものにする可能性がある。長い目で見ると、そうした影響によって今後親の世代が高齢化していった時の親子の助け合いの欠如につながるか懸念される。

筆者が懸念していた留守児童の「再生産」については、調査対象者8人全員が子どもができたなら一緒に暮らしたいという答えだった。8人のうち、Jさん、QQさんとYYさんは、子どもがまだいないため、経済基盤が整うまでは子どもを持つことは考えたくない。TQさんとJLさんは、留守児童だったことが苦い経験になっているため、自分の子どもを留守児童にはしたくないと強く思っている。Cさん、Fさん、BBさんは、子どもがいるため、子どもが自分のようにならないように幸せに成長させたいと望んでいる。8人は少なくとも意識の上では、留守児童の「再生産」には否定的である。その一方で、一緒に暮らす場所については、都市部を望んでいた。中国政府の戸籍制度の改革はそれを後押ししている。それと引き換えに、農村部から農民工だけでなくその子どもたちも都市に移住することが農村地域にどのような影響を与えるのかは本研究の射程ではないが、留守児童問題の解決策の副次効果として研究が必要である。

第5章 非貧困県の農村留守児童をめぐる状況及び研究の意義と限界

5.1 非貧困県の農村留守児童をめぐる状況—心に生じた問題を中心として—

本研究はまず、中国で深刻な社会問題となっている農村留守児童について、あまりマスメディアや先行研究で触れられないものの、人数の上では多数を占めると考えられる政府の定める貧困県以外の村に住む農村留守児童の状況を明らかにした。研究方法は事例研究で、湖南省澧県澧澗村に1校しかない小学校における参与観察とインタビュー調査である。「非貧困県の農村留守児童はどのような状況であるか」という問いに基づいて、報道や先行研究と比較すると、以下のような結論が得られた。

第1に、調査対象地の農村の小学校では、就学環境、留守児童の素行と学校や家庭のつながりという面は、報道や先行研究で取り上げられるケースよりも状況はさほど深刻とはいえない。就学環境について、先行研究では、農村の学校は校舎が老朽化し、衛生環境が悪く、教員が不足し、寄宿がないため児童に給食を提供できない状況であると指摘されていたが、調査対象の小学校は、校舎、トイレ、食堂などの施設が県の補助金により建て直され、毎日児童に3食提供していた。これらは、留守児童の抱える一般的な問題を考えると重要な違いである。一方、教員と予算が不足しているため、県が規定する一部分の授業は実施しておらず教育の質は十分とはいえない。しかし、この点は留守児童に特化した影響というよりは農村部の教育全体に関わる問題である。留守児童の素行と学校や家庭のつながりについて、先行研究では、留守児童はルールを守ることができず、無断欠席や遅刻をし、他人をいじめるなどの問題行動があると指摘されていた。また、後見人が教育の責任を学校のみ押し付けるため、家庭と学校のつながりが弱いという分析もあった。これに対して調査した学校でも、留守児童は宿題を剽窃し、自力で宿題をやれず、授業に集中できないなどの問題が教員から指摘されていた。その反面、教員が後見人とすぐに連絡するため、留守児童の状況を適確に後見人に伝えられている。学校と家庭の両方が留守児童の素行に気を配っているため、学校での問題行動は個人のレベルに留まってあまり深刻ではなかった。

第2に、調査対象村では、後見人は留守児童の生活面の世話は十分していたが、宿題などの学業面での助けにはなっていないことがわかった。また、それを補うための後見人と教員の連携は十分とはいえなかった。生活面の世話について、先行研究では、高齢の祖父母は、農作業と家事の疲れから留守児童の生活面の世話をする余裕や体力がないため、留守児童の栄養バランスや衛生・健康面で十分な配慮をできていないと指摘されていた。これに対して、調査対象の小学校では1日3回の食事が提供されるため食事の支度や栄養面の心配がない。筆者がインタビューした後見人5人のうち4人は50代から60代の祖父母だったが、子育てする体力に問題はなく、留守児童の衛生・健康の面にも関心を持っていた。しかし、留守児童の学業面については先行研究の指摘と同様に調査対象村でも困難な状況を抱えていた。後見人の祖父母が小・中学校卒業程度の学歴しかなかったり、農作業

と家事で忙しかったりするため、留守児童の宿題をサポートできない点は同じだった。その一方で、後見人による留守児童への無関心や暴力が学習意欲を低下させるという状況は調査対象村では見られなかった。問題行動の未然防止と同じように、学業面での問題への対応にも教員と後見人のきめ細かな連絡は重要であると考えられるが、インタビュー結果からは、その意思や断片的な話し合いの存在は確認できたが、時間がないなどの理由で十分とはいえない状況であった。

第 3 に、報道で大きく取り上げられ社会問題となっている留守児童に対する性的暴力や不慮の事故については調査対象村では深刻な問題にはなっていなかった。また、留守児童による強盗や窃盗などの犯罪事件も確認できなかった。調査対象村では、行政、学校、家庭の 3 者がいずれも留守児童が犯罪被害や不慮の事故に遭わないように注意深く対応していた。行政は登下校時の安全を確保するためスクールバスを提供し、教員は毎学期の父母会で後見人に対して児童の安全問題を強調するとともに日常的に児童に対して危ないところで遊んではいけないと注意を促していた。留守児童の身の安全を守ることに對する後見人の意識も高く、スクールバスを使わない場合は子どもたちの送迎をしていた。なお、調査対象とした学校の安全意識の高さの背景には、児童が学校の管理下にある時間帯に不慮の事故に遭った場合の管理者責任を問われた経験があることは注目に値する。学校側の自発的な努力だけに委ねるのではなく、訴訟や行政指導も留守児童対策への意識を高めることにつながる可能性がある。留守児童が犯罪に走る問題については、先行研究では郷・鎮の学校の周囲に子どもを誘惑する遊戯施設が多く、学校では教員が成績の悪い児童を無視するなどについて指摘されていた。調査対象の村では、このような問題が全く見られなかった。また、インタビューした教員と後見人の話から見ると、留守児童は学校での問題行動が深刻とはいえず、家庭で厳しい教育を受けていたことがわかった。そのため、調査対象の村では、留守児童の加害者としての犯罪問題は見られない。

第 4 に、幼い頃から親と離れて暮らす留守児童の心に生じている問題については、先行研究で指摘されているような困難を調査対象地の子どもたちも強く感じていた。先行研究では、留守児童は、孤独、不安、焦燥、劣等感という気持ちを持つと同時に、出稼ぎした親に対しては会いたいと感じる多くの留守児童に対して、恨みに思う声があることも指摘されていた。恨みに思う場合には、留守児童が自暴自棄になるケースも報告された。調査対象村でも、留守児童たちは先行研究に書かれているような心の悩みを抱えているのにもかかわらず、子どもたちがその悩みや苦しみを言動に表さないため教員と後見人は何も問題に感じていなかった。留守児童は楽しく学校生活・日常生活を送っているように見え、目に見える大きな問題がないように感じるため、子どもの心理状態にはこれといって関心を抱いていないことがわかった。しかし、5 人の留守児童へのインタビューには、親に会いたくてこっそり泣いた経験、自分の気持ちや考えを電話で親に伝えたくても伝えられないもどかしさ、後見人に自分の気持ちや考えを理解されずに無視され本音を話したくない気持ちなどが明確に表れていた。

以上のことから、先行研究で指摘されていた留守児童をめぐる問題のうち、貧困地域ではない湖南省澧県澧澗村でも見られた問題は、1つは後見人が宿題などの勉強を見てあげられず、その問題を学校の教員と連携して解決につなげられていない点、もう1つは子どもたちが言動に出せない心の苦しみである。このうち、筆者は後者がより深刻だと考えた。なぜなら、子どもの頃、心に抱えた苦しみは大人になってからも影響を及ぼす恐れがあるからである。そこで、同じ湖南省澧県澧澗村出身の20代半ばの元留守児童8人に、子どもの頃の留守児童経験がその後の人生に与えた影響について話を聞いた。留守児童経験が及ぼした影響だと本人たちが認識していたのは次の点である。

第1に、自分の性格形成に影響を与えたと考えていた。内向的になったという元留守児童もいれば、気性が激しくなったという人もいたが、本研究ではどのような性格を形成したかは重要ではない。注目すべきは、元留守児童が自分の性格の否定的な側面を留守児童経験とつなげて考えている点であり、それこそが影響と呼べるものである。

第2に、親とのコミュニケーションがなかったことに係る影響については、「親に否定されてきたため何事にも自信がない」「大人になっても親とのコミュニケーションが難しい」「独立心や自立心がある」という3つの調査結果を導いた。留守児童の時期に親や後見人とのコミュニケーションがうまくとれなかったことは、成人後に至るまで様々な影響を与えている可能性がある。確かに、インタビュー結果には代表性がなく、どのような影響が顕著に発生するかは言い切れない。しかし、ある程度共通していたのは、留守児童時代の親とのコミュニケーション不足は成人後の更なる親子関係の希薄化につながっているという点である。それは今後親の世代が高齢になった場合、親子の助け合いの欠如につながらないか懸念される。筆者が調べた限りでは留守児童が大人になった後の影響に関する研究はほとんどなかったため、調査の方法論上の限界を踏まえても、可能性のある影響を例示的にでも示した点は重要だと考えられる。

第3に、話を聞いた元留守児童8人全員が、将来自分の子どもと一緒に暮らしたいと述べ、意識の上では留守児童が次の世代の留守児童を「再生産」することに否定的な気持ちを持っている可能性を示した。しかし、一緒に暮らす場所としては出身地の農村ではなく、その近くの地方都市を希望する声が目立った。中国政府の戸籍制度の改革が進んでいるとはいえ、今後農村戸籍を変更して都市に永住できるのは学歴や資格などの専門知識・技術を持つ農村出身者に限られている。そのため、留守児童の「再生産」の懸念は依然として残っている。さらに、元留守児童が合法的に都市に定住できて次世代の子どもと一緒に暮らすことができるようになったとしても、その結果として農村の子どもが減少し少子高齢化が加速して農村は更に疲弊する可能性もある。留守児童の問題が深刻とはいえ、そのためだけの解決策ではなく、留守児童を含め、中国の都市と農村が抱える根本的な問題の解決に向けた政策が必要である。

5.2 研究限界と意義

本研究には、調査対象の選択上いくつかの限界があることは認めざるをえない。第1に、中国の非貧困県の農村留守児童の状況についての質的研究とはいえ、1つの村しか調査していないため、ここに記述した調査結果を一般論として述べることはできない。第2に、村で唯一の小学校を参与観察し、全教員にインタビューしたとはいえ、46人の留守児童全員から詳しい話を聞いたわけではなく、インタビューに応じてくれた5世帯のみを詳細な調査の対象としている点で、この学校に通う留守児童の全体状況を把握できていない可能性はある。第3に、調査対象村が政府の指定する貧困県に位置していないことは事実だが、個々の村の貧困ラインに係るデータは入手できなかった。インフラ整備状況などから調査対象村が貧困地域ではない合理的理由はあるものの、社会経済データに裏づけされていない点は留意が必要である。第4に、村を対象にしたため小学校4年生までしか調査対象に含めることができなかった。留守児童による犯罪事件など鎮や郷の中学校・高校で起きていると言われる問題については本研究では扱えなかった。

こうした調査対象を選択する上での限界はあったものの、マスメディアではほとんど取り上げられない貧困地域以外の、いわば「普通の」留守児童が抱える問題を示した点は意義があったといえる。自殺、火事、性暴力被害、犯罪などが留守児童をめぐる問題として社会の注目を浴びているが、地域の貧困状況と関わりなく、留守児童たちが親から離れ、自分の気持ちを言葉にできない心の悩み抱え込んでいる可能性は十分にある。絶対的な人数が多いと推計される非貧困地域の留守児童の状況や、留守児童の精神的な苦痛に関する更なる研究が必要である。その一方で、留守児童の「再生産」という悪循環を防ぐために、本研究で行ったような元留守児童への追跡調査や、戸籍制度を含めて親子が一緒に暮らせるための政策のあり方を議論する必要がある点も、本研究が投げかけた今後の課題である。

参考文献

中国語文献：

論文・書籍：

一张 「“留守儿童”」 『瞭望新闻周刊』、新华通讯社、1994年第45期、第37页。

丁钢 「未来中国教师教育的特性与方向——基于全国27所高等师范院校的调查」 『新疆师范大学学报（哲学社会科学版）』、新疆师范大学、2014年第6期、26-38页。

韦尧瀚、朱梦华、宁羚好 「农村留守儿童犯罪问题的刑事政策研究——以广西宾阳县为实证分析」 『黑龙江省政法管理干部学院学报』、黑龙江省政法管理干部学院、2014年第2期、61-64页。

王进鑫 「青春期留守儿童性安全问题调查研究」 『青年研究』、中国社会科学院社会学研究所、2008年第9期、7-14页。

王宗萍、段成荣 「第二代农民工特征分析」 『人口研究』第26卷第2期、中国人民大学、2010年第2期、39-44页。

王建斌 「区域内城乡教育均衡发展农村留守儿童隔代家庭教育问题调查研究」 『课外阅读』、华夏出版社、2013年第9期、260-261页。

王晓丹、陈旭 「留守儿童与非留守儿童社交焦虑及认知偏差的比较研究」 『四川师范大学学报（社会科学版）』第37卷第2期、四川师范大学、2010年3月、57-61页。

王霞 「农村留守儿童犯罪原因分析」 『法制与经济』、广西日报社、2010年第1期、86-87页。

卢妹香、冷晓君 「湖南省农村留守儿童监护现状调查」 『中国妇运』、全国妇联、2014年第7期、31-34页。

田莉芳 「浅议留守女童性侵害问题」 『法制博览』、共青团山西省委、2015年32期、第170页。

叶敬忠、王伊欢、张克云、陆继霞 「父母外出务工对农村留守儿童学习的影响」 『农村经济』、四川省农业经济学会、2006年第7期、119-123页。

刘明华、李朝林、刘骁畅 「农村留守儿童教育问题研究报告」 『西南大学学报（社会科学版）』第34卷第2期、西南大学、2008年3月、105-112页。

全国妇联课题组 「全国农村留守儿童状况研究报告」 『中国妇运』、全国妇联、2008年第6期、34-37页。

全国妇联课题组 「我国农村留守儿童、城乡流动儿童状况研究报告」 『中国妇运』、全国妇联、2013年第6期、30-34页。

刘洁辉 「农村留守儿童犯罪原因及对策研究」 『陕西行政学院学报』第21卷第2期、陕西省行政学院、2007年5月、104-107页。

刘蔚然 「『人民日报』关于留守儿童报道研究」 『今传媒』、今传媒杂志社、2015年第1期、37-38页。

李文侠、王东峰 「会计职业资格证书制度对会计专业学生就业作用的研究」 『中国乡镇企

- 业会计』、中国乡镇企业协会、2012年第5期、233-234页。
- 李中建 「我国农民工政策变迁：脉络、挑战与展望」 『经济学家』、西南财经大学、四川社会科学学术基金会、2011年第12期、70-76页。
- 宋月萍、张耀光 「农村留守儿童的健康以及卫生服务利用状况的影响因素分析」 『人口研究』第33卷第6期、中国人民大学、2009年11月、57-66页。
- 张永丽、黄祖辉 「中国农村劳动力流动研究述评」 『中国农村观察』、中国社会科学院农村发展研究所、2008年第1期、69-79页。
- 张永强、耿亮 「农村留守女童遭受性侵害问题及防范对策研究」 『预防青少年犯罪研究』、中国预防青少年犯罪研究会、2016年第3期、87-94页。
- 李光友、陶方标 「14~16岁留守儿童心理状况及自杀倾向分析」 『中国公共卫生』第25卷第8期、中华预防医学会、2009年8月、905-907页。
- 肖庆华 『农村留守与流动儿童的教育』 中国社会科学出版社、2012年12月。
- 张丽华 「农村留守儿童意外伤害原因分析与对策」 『当代医学』第14卷第20期、中国医师协会、2008年10月、155-156页。
- 张体锋、魏建国 「关于新形势下农村留守儿童犯罪问题的思考」 『山东省农业管理干部学院学报』第27卷第5期、山东农业工程学院、2010年5月、35-36页。
- 陈昕苗 「谁来为留守儿童点亮心中不灭的灯——贵州毕节留守儿童自杀事件背后的心理问题探析」 『浙江青年专修学院学报』、浙江青年专修学院、2015年第4期、24-28页。
- 李炳呈、任建东 「论解决农村留守儿童教育问题的最佳途径：集中寄宿制」 『长沙大学学报』第23卷第1期、长沙大学、2009年1月、132-134页。
- 吴倩 「家长督查孩子做家庭作业的策略」 『中国家庭教育』、中国教育学会、2013年第3期、36-38页。
- 余凌 『留守经历与农村儿童发展：家庭与社会化的视角』 上海社会科学院出版社、2013年6月。
- 张留喜、张丽华、李婷婷、王敏 「农村中小学校生活饮用水和厕所卫生现状调查」 『安徽预防医学杂志』、安徽省预防医学会、2009年第1期、27-29页。
- 张晗、王鑫 「农村留守儿童安全问题调查与分析」 『农业网络信息』、中国农业科学院农业信息研究所、2012年第8期、120-122页。
- 陈智、朱成科 「我国农村留守儿童隔代监护的教育困境及解决路径」 『江苏教育研究』、江苏省教育科学研究院、2013年第4期、7-10页。
- 李婷婷 「农村留守女童遭遇性侵犯问题及对策研究」 『河南公安高等专科学校学报』第1期、河南警察学院、2008年2月、11-13页。
- 吴霓、朱富言 『农民工子女异地中考政策研究』 教育科学出版社、2011年12月。
- 范小玉、且淑芬 「农村劳动力转移状况与特征」 『中国统计』、中国统计出版社、2002年第7期、26-27页。
- 范兴华、方晓义、刘学勤、刘杨 「流动儿童、留守儿童与一般儿童社会适应比较」 『北

- 北京师范大学学报』、北京师范大学、2009年第5期、33-40页。
- 范先佐 「农村中小学布局调整的原因、动力及方式选择」 『教育与经济』、中国教育经济协会、2006年第1期、26-29页。
- 国家统计局住户调查办公室 『2015 中国农村贫困监测报告』 中国统计出版社、2015年12月。
- 段成荣 「流动人口对城乡社会经济发展的影响」 『人口研究』、中国人民大学、1998年第4期、58-64页。
- 段成荣、吕利丹、郭静、王宗萍 「我国农村留守儿童生存和发展基本状况——基于第六次人口普查的数据分析」 『人口学刊』第35卷、吉林大学、2013年第3期、37-49页。
- 段成荣、杨舸、马学阳 『中国流动人口研究』 中国人口出版社、2012年3月。
- 胡朝晖、王红玉 「农村留守儿童安全问题探析」 『西南农业大学学报（社会科学版）』第10卷第2期、西南大学、2012年2月、27-31页。
- 高志强、朱翠英、卢妹香 『农村留守儿童关爱服务体系建设——基于湖南省的实证研究』 湖南科学技术出版社、2013年7月。
- 陶菁 「农村留守儿童教育出现的新问题及其对策——对“两免一补”政策效应的调查与思考」 『江西社会科学』、江西省社会科学院、2007年第7期、253-256页。
- 黄教珍 『农村留守儿童问题研究』 江西人民出版社、2013年12月。
- 董士县、李梅 「农村留守儿童监护问题与犯罪实证研究」 『中国人民公安大学学报（社会科学版）』、中国人民公安大学、2010年第3期、133-139页。
- 谢妮、申建强、陈华聪 『农村留守儿童教育现状研究』 经济科学出版社、2010年9月。
- 董晓玲 「农村家长参与中小学子女教育的困境与出路」 『新课程研究（基础教育）』、教育部基础教育课程教材发展中心、2010年第6期、117-119页。
- 谢培松 「农村中小学教师队伍：问题与分析」 『沧桑』、陕西省地方志办公室、2006年第4期、114-115页。
- 潘璐、叶敬忠 「农村留守儿童研究综述」 『中国农业大学学报（社会科学版）』第26卷第2期、中国农业大学、2009年6月、5-17页。

データ報告：

中国青少年研究中心 「全国农村留守儿童状况调查研究报告——“全国六类重点青少年群体研究”课题成果」 2014年12月2日。

http://qnzz.youth.cn/qsnyj/ztyj/201412/t20141202_6150770.htm

（閲覧日 2016年12月20日）

新公民计划 「中国流动儿童数据报告 2014」 2014年9月。

http://blog.xingongmin.org.cn/?page_id=702 （閲覧日 2016年12月20日）

新聞記事：

「农村留守儿童三姐妹7年内相继伤残」 『新华每日电讯』 2005年11月20日。
<http://news.163.com/05/1120/16/2310SBRR0001122B.html> (閲覧日2016年12月20日)

「那些孩子为谁在留守」 『新京报』 2015年7月13日。
http://epaper.bjnews.com.cn/html/2015-07/13/content_587141.htm?div=-1
(閲覧日2016年12月20日)

「性侵阴影下的村庄」 『新京报』 2015年7月13日。
http://epaper.bjnews.com.cn/html/2015-07/13/content_587142.htm?div=-1
(閲覧日2016年12月20日)

「中央扶贫开发工作会议胡锦涛、温家宝发表重要讲话」 『新华新闻』 2011年11月29日。
http://news.xinhuanet.com/politics/2011-11/29/c_111203767.htm
(閲覧日2016年12月20日)

「扶贫办发布“国家扶贫开发工作重点县名单”」 『中央政府门户网站』 2012年3月19日。
http://www.gov.cn/gzdt/2012-03/19/content_2094524.htm
(閲覧日2016年12月20日)

日本語文献

論文：

阿古 智子 「中国農村地域における民弁学校の活性化と地域の人づくりに向けての課題——湖南省の貧困県桑植県における実地調査から——」 『国際開発研究フォーラム』5、名古屋大学、1996年6月、187-198頁。

稲井富赴代 「中国の貧困農村における義務教育についての一考察——安塞県楼坪郷での聞き取り調査をもとに——」 『高松大学研究紀要』第54・55合併号、高松大学、2011年2月28日、47-70頁。

鎌田 文彦 「中国における戸籍制度改革の動向——農民労働者の待遇改善に向けて」 『レファレンス』60(3)、国立国会図書館調査及び立法考査局、2010年3月、49-65頁。

鮑 良 「中国農村地域における民弁教師の問題」 『研究論叢』9、神戸大学教育学会、2002年12月、15-21頁。

新聞記事：

金順姫 「孤独な『留守児童』命絶つ」 『朝日新聞』 2015年7月3日。

5.出稼ぎのことに対してどんな考えを持っていますか？

次の世代についての考え：

- 1.結婚、子どもができることについてどう考えますか？
- 2.自分の子どもの将来に対して、どうやって教育したいですか？（誰と一緒に生活したいですか？子どもどうやって交流したいですか？）
- 3.子どもの教育について、何の側面を重視したいですか？

- 1.对于结婚,生孩子的事情怎么看?
- 2.将来对于自己的孩子,想要怎么教育?(想要和谁一起生活?怎么和孩子交流?)
- 3.关于孩子的教育,想要侧重哪一方面?